
FAIRY TAIL ～悠久なるトキの中で～
刃牙

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL く悠久なるトキの中でく

【作者名】

刃牙

【あらすじ】

フィオーレ王国1と言われる魔導士ギルド・妖精の尻尾。優秀な人材が多く集まるギルドの中でも、ずば抜けた実力を持ち、「妖精の尻尾最強の一人」と呼ばれる幾人かの実力者たち。この中の一人にアルトリス・ベルジュラックという男がいる。彼は黒い炎を自在に操り、常人離れた肉体の力を持って、最強の一人に数えられている。

そんな彼には何があっても果たしたい、ある願いがあった。その願いを叶える為、出会いと別れを繰り返し、傷付きながらも彼は進

む。

プロローグ

闇ギルド鉄の森のギルドマスター達の命を狙ったテロ事件から数日。
アイゼンヴァルト
幸いにも、テロ事件は犠牲者を出す事なく解決。その事件で使用されたゼレフ書の悪魔が宿るララバイは嚴重に封印され、鉄の森のメンバーはリーダーのエリゴールを除き全員が評議院に逮捕されたのであった。

さて、鉄の森の計画を頓挫させた魔導士達が所属する魔導士ギルドフェアリーテイル妖精の尻尾はいうと、何ら変わりなく、いつもと同じ日常を過ごしていた。

妖精の尻尾のマスター マカロフ・ドレアーはジョッキを片手に今日も元気に騒いでいるギルドのメンバー達を見守っていたが、ふと思い出したように看板娘のミラジェーン・ストラウスに視線をやり、確認をとる。

「そう言えば、ミラ。もうじきじゃったか？アルトリスが帰って来るのは」

「はい♪ 今日か明日には帰って来ると思いますが」

ミラジェーンの言葉でギルドはにわかになわめき始める。それはギルド全体に波及していく。まだ入って日が浅く、面識のないルーシ

イであるが、その名は彼女も知っていた。近くにいるグレイにおそるおそるといった様子で尋ねる。

「ねえ、アルトリスって、あの煉獄のアルトリス？」

「おっ、よく知ってんな」

それを聞いたルーシィの顔は青褪める。アルトリスにまつわるエピソードは彼女が愛読している週刊誌・ソーサラーで目にしている。しかし、それらは数多くの凶悪な盗賊団や闇ギルドの壊滅の張本人であるといったもので、彼女の中のアルトリスは非常に凶悪な人物になっていたのだ。

これから大丈夫なのかと不安を覚えるルーシィだが、彼女の様子を感じ取ったエルザがその不安を和らげようと、フォローする。

「そんなに不安に感じる事はない。アルトリスは強く、優しい奴だからな。ルーシィの思うような事はないだろう」

エルザの言葉に安心したのか。ルーシィの顔に生気が戻る。

「いつ帰ってくるんだろうな!? 帰って来たら勝負だ!!」

ルーシィから少し離れた場所で、ナツが興奮した様子で騒いでいる。マックスらの無謀だからやめておけといった声も耳に入っていないようで、また明日あるエルザとの決闘を忘れたかのように闘志を燃やしていた。

「やめとけよ。また連敗記録を伸ばすだけだぜ」

「あの時と今のオレは違うっての!!
—!!」
うおおおおお！燃えてきた

その時、酒場の扉が開き、蒼い眼をした金髪の青年が現れた。

「おーおー、相変わらず元気だなあ」

「アルトリス!!」

上は第二ボタンまで開いた白のYシャツを着て、下は黒いズボンを履き、また首には丸い、オレンジ色の水晶がかけられている。その表情からは怖さを感じない。彼が最強の一人に数えられる男・煉獄のアルトリスなのか。自分の中のイメージとあまりに掛け離れた姿にルーシィは疑問に思うが、皆の反応を見るとそうなのだろう。

「よっ！久しぶり」

「帰ったか……アルトリス」

マカロフの前に立つアルトリス。先程までの喧騒が嘘のようにギルドは静まり返っている。

「おう！久しぶり！にしても、ちいっと老けたんじゃない？マカロフ」

「老けてないわい!!　それでどうじゃった？」

要領を得ない言葉であったが、アルトリスはマカロフが何を訊いているのか理解し、笑顔で返事を返す。

「ああ。ウォーロッドからの依頼はしっかりこなしたぜ！」

「そうか。ご苦労じゃったな」

「いいって事よ！んじゃ、オレは休むかな」

アルトリスは伸びをすると踵を返し、ギルドを後にしようとする。しかし、ナツが彼の前に立ち塞がり、勝負を挑む。

「アルトリス!!　勝負だ！」

「ん、よし！いいぜ。でも、ちょっと寝させてくんね？1時間ぐらい」

ナツは出鼻を挫かれたようで、今すぐにでもやりたい様子だったので、アルトリスが言った言葉で不承不承といった感じではあるが、了承する。

「お前だって本気でやりてえだろ？」

向かい合うアルトリスとナツ。二人を中心にギルドのメンバー達が円を作っているが、彼らが気にしているのはナツがどれだけ善戦するかで、勝てるとは毛頭思っていなかった。

「んじゃ、マカロフ。コールよろしく！」

「それでは、準備はよいな……？始め！」

最初に仕掛けたのはナツだった。口から火を吐き、アルトリスに対して先手を打つ。

「火竜の咆哮!!」

アルトリスはそれに対して微動だにせず、それを受けた。煙が彼を包む。無傷。ダメージを与えられていない。しかし、その顔は笑みを浮かべていた。

「少しは成長したみてえだな……」

「今日こそオレが勝つ!!」

「火竜の鉄拳！」

ナツは右手に炎を宿し、殴りかかる。アルトリスは左手で攻撃を弾

き、それをいなす。するとナツは左手にも炎を宿し、ゼロ距離で攻撃を始めた。両手で連続しての攻撃だった。

「うおおおお!!」

ギャラリーに混じり、勝負の行方を見守っていたルーシィは驚嘆の声を上げる。

「ナツが押ししてる!!」

しかし、グレイはそれを否定するように声を掛けた。

「……本当にそう見えるか？」

「えっ?だって、ナツに押されてアルトリスさんは防戦一方になってるじゃない」

「アルトリスの足元をしてみる」

グレイの言葉に従って、ルーシィはアルトリスの足元を見る。綺麗に整備された、何の変哲もない地面。それが何なのかと疑問を抱くが、彼が次の瞬間言い放った一言に目を見開く。

「アルトリスは一度もあの場から動いていねえし、片手しか使っちゃいねえんだ。左手でナツの攻撃を全部捌ききってるんだよ」

「アルトリスは左手一本で、ナツが両手で攻撃する以上のスピード

で防御を行っているー

それに気付いた瞬間、ルーシィは戦慄を禁じ得なかった。その気になれば、アルトリスはナツに攻撃を与える事ができるという事なのだ。ルーシィにとってナツはある種の憧れでもあった。妖精の尻尾に誘ってくれた、初めての仲間でもあり、今まで目にしてきた強さは自分にはないものだった。ナツが最強に近い存在なのだと、確証のない確信を抱いてもいた。そんなナツが遊ばれているという事実に、ルーシィはただただ驚くしかない。

「そんな……ナツが子供扱いなんて……」

「んじゃ、終わりにすっかな」

アルトリスはそう言って、右手に力を込めた。彼の右手がナツの顎に吸い込まれていく。宙を舞い、地面に落ちる。目を回し、立ち上がれないナツの姿を見て、マカロフは声高く勝者の名を告げた。

「そこまで!! 勝者!アルトリス!」

「あれが最強の一人に数えられる男の力ってやつだ。遥かに高い頂きにいる男のな」

ジョゼの野望

アルトリスとの勝負を終え、目を覚ましたナツは椅子に座り、悔しがっている様子だった。そのすぐ目の前に座っているルーシィは先程の勝負を興奮した様子で振り返っていた。

「さっきの凄かったな〜！ナツが手も足も出ないなんて思わなかったし……」

「次はか〜つ!!」

ナツはアルトリスに勝つ事に闘志を燃やしているが、ルーシィは無理だと感じてしまった。純粋な格闘に関しては素人同然の彼女であるが、それでもナツとアルトリスの実力に大きな開きがある事は分かる。

「どうやってよ？」

「そんなもん、気合いだよ！気合い！」

ナツとルーシィの会話にハッピーとエルザも参加し始めた。

「けど、アルトリス全然本気じゃなかったよ〜？本当にナツに勝てる日が来るのかなあ？」

「確かにハッピーの言う事も一理ある。正直、アルトリスの力は底

が見えないからな」

「そんなに強いんだ……」

エルザの言葉に改めてその強さを思い知る。しかし、エルザはナツに大きな期待を寄せているようだった。いつかは自分を超え、アルトリスを超えるのではないかと。

「だが、ポテンシャルならばナツもアルトリスに引けをば取らないと私は思っているぞ」

「お、おう！」

ナツが少し照れ臭そうに頭をかく。少し会話が途切れ、エルザはふと、思い出したようにルーシィに話しかける。

「そう言えば、ルーシィはアルトリスと会うのは初めてだったな。挨拶してきたらどうだ？」

「えっと……今行くのはちょっと……」

エルザの提案を聞いたルーシィは顔を赤らめ、目を逸らす。カウンターの近くに座るアルトリスはミラジェーンと楽しそうに会話していた。あそこまで楽しそうに話している二人の中に飛び込むのは憚られる。

「あんなのいつもの事だぜ。一々遠慮してたら、いつまで経っても

挨拶できねーぞ」

グレイの言葉にルーシィは思わずアルトリス達を二度見してしまう。挨拶しておいた方がいいのか。その心は揺れていた。

「えっ!? ……あれ、いつもなの?」

「あい! 正確にはミラがアタックを仕掛けてるって言う方が正しいけど」

「ミラちゃんが好きなのは分かるんだけどよ。肝心のアルトリスがどっちか分からねえんだよな……」

「へー! そうなんだ」

グレイとハッピーがアルトリス達の恋愛模様を説明している中、エルザは二人の元に近付いていた。

「アルトリス……ちょっといいか? お前に紹介したい者がいるのだが」

「おう。いいぜ」

エルザがルーシィを手招きする。腹を括るしかないと、ゴクリと唾を飲み込み、彼らの元へ歩み寄る。

「星霊魔導士のルーシィだ」

ルーシィの姿を見たアルトリスの瞳孔が大きく開かれた。

「ル、ルーシィです！よろしくお願いします！」

一瞬、呆然とした様子を見せていたアルトリスだが、すぐに平静を取り戻し、挨拶を返した。

「おう！よろしく!! そっか、期待の新人ってルーシィの事だったのか！」

「ああ。中々の活躍ぶりだぞ」

「ルーシィはねく、牛とか蟹とか出せるんだよ！」

「……へー。黄道十二門をねく」

意味深にそう呟いたアルトリスを見て、ルーシィの背筋が伸びる。何か気に触れてしまったかと不安に感じるが、しかしアルトリスが次に話した言葉を聞き、それはすぐに杞憂であると分かった。

「星霊も心を持ってるからな。大切にしていられよ！」

「は、はい！」

「よっ、と。それじゃ、オレはちょっと上で一休みすっかなー」

アルトリスは二階に行く際、マカロフに視線を送る。それに気付いているのは当事者以外にはいなかった。

「……アルトリス様。ご無沙汰しておりやす」

スキンヘッドの男が恭しくアルトリスに挨拶をした。男は情報屋で、彼がここにいるのはこの男から情報を得る為だ。人目を避ける為、マグノリアから離れた場所にある森の中で落ち合っていたのである。

「おう。久しぶり……いきなりでわりーけど、こいつを知ってるな」

アルトリスが懐から写真を一枚取り出した。そこに写っているのはルーシィだ。

「……ハートフィリア財閥令嬢　ルーシィ・ハートフィリア様ですね。1年前から家出をして、現在は妖精の尻尾フェアリーテイルに所属しておりやすね」

男の話を聞いたアルトリスだが、大体の予想はついていたのだろう。特段驚いた様子は見せなかった。

「……やっぱりそーか」

「よく気づきましたね。妖精の尻尾はマスター・マカロフも気付いていないと思っていやしたが」

「伊達に闇ギルドを潰してねーよ。オレは正規ギルドの中じゃ、裏社会に精通してる方だからな。それにオレはレイラに会った事がある！」

「なるほど。確かにルーシィ様はレイラ様に瓜二つでございますからなあ」

しかし、ここからが本題だ。アルトリスが本当に知りたい事はこの先にある。

「ハートフィリア財閥の最近の動向を全部教えろ」

ルーシィの実家は、ハートフィリア鉄道を運営しているハートフィリア財閥。その影響力は凄まじい。財閥がギルドにも、ルーシィにもコンタクトを取らず、静観のしている事がアルトリスには不気味に映って仕方がなかった。

「……ハートフィリア財閥総帥・ジュード・ハートフィリア様は密かにルーシィ様とサワルー公爵の縁談を進めています」

「ビジネスか……」

「はい。ジュード様はこの婚姻によって、ハートフィリア鉄道の方進出への基盤を築くつもりみたいですね」

昔からよくある常套手段ではある。だが、ここで浮かぶ疑問はどうやってルーシーを取り返そうとするかだ。

「なるほどなく。んで、どうやってルーシーを取り返すつもりだ？」

「そ、そこまでは……まだ」

「嘘つくならもうちょい上手くやれよ……知ってんな？」

男の不審な挙動を見て、アルトリスは彼が何かを知っていると確信を持つ。脅しの意味を込め、凄みながら問いかける。目を逸らした男は、しかし口を割る事はない。すると背後からある男の声が聞こえる。

「流石はアルトリスさん……隠し事は通用しませんか」

「お前は……!？」

その男の顔を見て、アルトリスは顔を顰めた。現れたのは魔導士ギルド・幽鬼ファントムロードの支配者のマスター ジョゼ・ポーラだった。

「まあ、隠すつもりもなかったんですがね」

「ジョゼ……!!」

アルトリスの意識がジョゼに向いた隙をついて、男がこの場から逃げ出すが、気にも留めずにいた。ジュードがしていた事を知り、これ以上彼を引き止める理由がなくなったからだ。しかし、内心悪態をつきたくなっていた。ここまで大事な事を何故黙っていたのかと。

「そうか。お前んところが絡んでるのか」

謎が解けはしたが、この場を包む緊張感は先程よりも増している。ジョゼのギルド・幽鬼の支配者とは長年、対立関係にある。何を考えているのか分からない以上、安心はできない。

「ええ。ジュード・ハートフィリア様が御令嬢のルーシィ様を取り戻すよう、我がギルドに依頼をしましてね。何でも、ルーシィ様は妖精の尻尾フェアリーテイルにいるとか」

「何が言いてえ？」

「取り引きをしませんか」

「取り引き？」そう聞き返したアルトリスにジョゼは頷き、取り引きの内容を話し始める。

「そう。ルーシィ・ハートフィリアをこちらにお渡し下さい。あなたも仲間が死ぬのは嫌でしょう？」

戦争でも仕掛けるつもりなのだろうか。確かにそれは避けたいとこ

るだ。仲間の血が流れる事は誰も望んでいない。しかし、戦争を回避するにはルーシーを渡すしかないと言っても、仲間をジョゼに渡すわけにはいかない。この男は最も信用ならないからだ。

「どうしますか？」

アルトリスは考えた。何が最善なのか。大をとるか小を取るかという考えは彼にはない。しばしの沈黙の末にアルトリスが出した答えは幽鬼の支配者の面目を保ちつつ、仲間を守る為の策だった。

「……お前んとこの魔導士と一緒にオレがルーシーを親父さんの元に連れて行く。それが最大の譲歩だ」

ジョゼは悪くないと言わんばかりに頷いた。しかし、その直後だった。

「なるほど……ですが、それでは困りましたねえ」

ジョゼはアルトリスに魔法弾を放つ。吹き飛ばされ、木にぶつかる。大木は折れ、アルトリスは大木の下敷きになってしまう。

「私はルーシー様を利用したいのですよ！」

「それがお前の狙いか……」

大木が粉々に砕け散り、アルトリスはゆっくりと立ち上がる。

「なら、忠告しといてやる」

右の額には黒い痣が浮かび、それは右の目蓋の下にも顕現している。溢れ出る魔力は、彼を中心に振動を起こし、地面はひび割れ、突風を巻き起こす。大地は悲鳴を上げていた。

「諦めろ！」

黒く染まった瞳がジョゼを射抜き、闇の魔力が彼を襲う。

「オレ達がそれを…させねえ!! !!」

秘密兵器

アルトリスとジョゼ。二人の戦いは苛烈を極めていた。

「デッドウェイブ!!」

「ヘルブレイズ
獄炎！」

怨霊のようなエネルギー体と煉獄の黒炎がぶつかり合う。二つの魔力は爆発し、爆風を巻き起こす。

「流石は煉獄のアルトリスさん……私と互角の戦いを演じられるとはね」

押しているのはジョゼの方だった。目立った外傷がないジョゼに対し、アルトリスは身体に小さな傷をいくつも作り、服は消し飛んでいた。左腕に巻かれた包帯と右腕にある紫色のギルドの紋章が露わになっている。余裕があるように見えるが、どうやって戦っていくかを必死に考えていた。

「マカロフとオレを同時に相手にしたら負けちまう。そう思ったから闇討ちみてえな真似してきたんだろ？」

アルトリスの力がジョゼに劣っている訳ではない。むしろ勝っている。この二人の差は非情になれているかどうかの差だ。殺さない為に本気を出せないアルトリスと殺す気で戦っているジョゼ。この差

が今の戦況を作り出していた。

「ルーシィを奪うだけなら、オレ達をやる必要はねえ筈だ。こっそりと誰にも気付かれずに誘拐しようとするりゃあできたからな。お前の目的は何だ？」

「……ふむ。まあ、いいでしょう。なら、教えてあげましょう」

「ギルダーツ、アルトリス、ラクサス、ミストガン、エルザ。この5人の名は我が町にまで……いや、国中に広まった。いつしか幽鬼ファントムロードの支配者と妖精フェアリーテイルの尻尾は国を代表する二つのギルドになった」

ジョゼが語り出した内容は醜いものだった。

「気に入らんのだよ！クソみてーに弱っちいギルドだったくせに、我がギルドと同列に語られるなど!!」

「だが、それよりも許せんのはこの国有数の資産家の娘が貴様らのところにいる事だ！ハートフィリアの金を貴様らが使えたとしたら……間違いなく我々よりも強大な力を手に入れる!! それだけは許しておけんだ！」

妖精の尻尾と幽鬼の支配者は長年対立関係にある。それがこの醜いまでの感情を生み出したのか。

アルトリスは怒りを覚えた。その為だけに自分の仲間を傷付けるつもりなのかと。

「くだらねえ」

「その為にオレの仲間達の血を流させようってか？」

「それだけではない！マカロフには絶望と悲しみを与えてから殺す
!! 愛するギルドと愛する仲間達を殺してな!!」

「もう我慢の限界だー」

アルトリスの怒りが爆発した。

「……テメエは人間を何だと思ってんだ……!?」

突風が吹き荒れる。闇の魔力と突き刺すような怒りがジョゼに向けられていた。

「更に魔力が上がった!? まだ全力ではなかったというのか!!」

アルトリスは右手を握り締め、ジョゼに向かってパンチを繰り出したその次の瞬間。ジョゼは鳩尾に衝撃を感じた。

しかし、その時にはもう既に遅く、1発、2発、3発と衝撃を感じる度に木々を打ち貫きながら、吹き飛んでいく。

「ガハッ……!! !?」

「（何が起きた!?）」

アルトリスがしたのはただのパンチだが、ジョゼとの距離は開いていた。つまりは風圧だけでジョゼを吹き飛ばしたのだ。

「もう諦めろ。お前じゃオレには勝てねえよ」

ジョゼが僅かな時間、意識を飛ばしていた間に数十メートルの距離を詰めたアルトリスは既に右拳に魔力を集中させていた。とてつもなく強大な魔力が一点に集中している事を感じ取り、ジョゼの額から一筋の汗が溢れる。

「ぐっ……アリア!!」

「……これで終わりにしてやる……」

アルトリスの背後から大男が音もなく現れた。

「死の空域・零!」

彼の両手から発せられる生命力を奪う風がアルトリスを襲う。ジョゼはノロノロと立ち上がり逃げようとしますが、アリア構う事なくアルトリスが放った技をくらってしまふ。

「ヘルドライブ
獄衝!」

「ぐおおおおおおおーっ!!!!」

アッパーのように放たれた黒いドリル状の魔力がジョゼを天高く打ち上げる。その技は先程のパンチと何ら変わらない。ただ先程のパンチは風圧による攻撃なのに対して、獄衝は闇の魔力を帯びた衝撃波による攻撃。それだけである。ただ、魔力を帯びた攻撃である分だけ速く、強い。

「……よく飛んだなあ」

「さあてと。どうする？このまま帰るなら何もしねえけど、やるってんなら……まっ、言わなくても分かるよな」

アルトリスは背後にいるアリアを睨みつけながら問いかけた。殺気の籠った、狂気すら感じさせる漆黒の瞳。知らず知らずのうちにアリアの右足は一步後退してしまう。

アルトリスには敵わないと判断しての事だろう。塾考の末にアリアが選択したのは撤退だった。

「さあて。帰るか」

アルトリスが帰って来てまず目にしたのは巨大な鉄の棒で滅多刺しにされたギルドの姿だった。大事なギルドが滅茶苦茶にされている事に一瞬動揺したが、すぐに犯人に思い当たる。まだまだ面倒事が続きそうだと重い頭を抱えながら、重い身体を引きずって中に入る。

「この分じゃ、ジョゼの奴もピンピンしてそうだな……」

中に入って、被害を受けていない地下に向かうと、誰かの怒鳴り声が聞こえてきた。

「納得いかねえぞ!! じっちゃん! オレはあいつら潰さなきゃ気がすまねえ!! !! 」

その声の主はナツだ。他のメンバー達の中にも殺気立ち、仕返しをしてやろうと話す者もいる。妖精の尻尾には何故こうも血の気の盛んな連中が多いのかと、溜め息を漏らす。気持ちは分かるが、時には堪える事も必要だ。確かに今の状況ではそうも言えなくなりそうだが。

ここは評議院を使って、抗争を未然に防ぐ方向に持っていき、ギルドを説得するなりして、依頼を撤回させるしかないだろう。

「ぶっそーな事言ってんじゃねーよ! やり合ったら、ギルドの誰かが死ぬ可能性だってあんだからな」

評議院には妖精の尻尾を毛嫌いしている者が多く在籍している。もしも戦ってしまえばこれ幸いとギルド解散命令が出されてもおかし

くはないのだ。堪えなくては妖精の尻尾が消えてしまう。

「アルトリス!!」

「顔色悪いぞ」

「心配すんな……何でもねえよ」

「そうか……それでどうじゃった？緊急のS級クエストは」

早くマカロフに伝えて、戦争を回避する為に動かなくては。そう考えても、身体が言う事を聞かない。まるで鉛のように重い。

「その前に……ちょっと水くれるか？」

視界が暗転する。

「アルトリス!？」

マグノリアの東の森にある木の家には妖精の尻尾の顧問薬剤師であるポーリュシカが住んでいる。アルトリスははじめ、マグノリアにある病院の医師に診てもらったのだが、原因が分からず、魔法によ

る傷を癒すスペシャリストである彼女がいる木の家に運び込まれ、診てもらっていた。この家には運び込まれたアルトリスの他にマカロフ、ミラジェーン、エルザ、ナツが来ていた。

「アルトリス……」

「どうじゃ？ポリーリシカ。アルトリスの容態は？」

険しい顔でアルトリスを見つめているポリーリシカにマカロフが容体を尋ねた。意識不明。高熱。これらを引き起こしているのは何が原因なのか。皆、気が気でない様子だ。

「……これは……死の魔法だね」

「死の魔法!?」

「安心しな。アルトリスはこの類の魔法には耐性がある。死ぬ事はないだろうさ。だが、当分は安静だね」

ポリーリシカは険しい顔を崩さない。他の魔導士ならばまず死んでいる。アルトリスだからこそこの程度で済んでいる。

「そうか……」

皆がホッとしたところで今度はエルザがマカロフに問い掛けた。

「マスター。先程アルトリスが言おうとしていた事は」

『ルーシィがハートフィリア財閥の娘!?』

『ちよいと調べてくる。財閥がこのままルーシィをほっとくとは思えねーし。ギルドに何かしてくんなら、対策も考えなきゃなんねえだろ?』

「……少し気になる事があってな、アルトリスに調べてもらっていいたんじゃ。緊急S級クエストとしてな」

マカロフは詳細を隠し、エルザに事情を伝えた。アルトリスが何を掴んできたのかは分からない。しかし、ファントムがこのタイミンで仕掛けてきた事は果たして偶然なのか。マカロフは険しい顔になっていく。狙いはルーシィである可能性が高い。

「リーダーダスにルーシィを隠れ家へ連れて行ってもらうか」

いや、それではいつまでいけばいいのか分からない。ファントムが仕掛けて来るかどうかはまだ分かっていないのだ。ここは彼女と仲の良いエルザ達に守ってもらった方がいいのかもしれない。

泣き腫らしたような痕のあるミラジェーンが不意にナツに話し出す。

「ナツ……これがS級クエストよ。今回は偶々行ったクエストが運が良かっただけ。一歩間違えれば死ぬ危険だってあったの!!」

ガルナ島に住む住人から月を破壊して欲しいというS級の依頼があ

った。これを受ける資格があったのはアルトリス、エルザ、ラクサス、ミストガン、ギルダーツの5人だけ。この5人の誰かの同伴があつて、資格のない者達も依頼を受ける事ができる。

しかし、ナツはハッピーとルーシーを連れて勝手にS級に行つてしまった。グレイもそこに加わり、最後にはゼレフ書の悪魔・デリオラの復活を阻止する為にエルザも入れた5人でクエストを達成した。

だが、死んでもおかしくない。そう断言できるクエストはたくさんある。今回はそうならずに済んだだけなのだ。とミラジェーンは言う。ナツ達のした事は彼ら自身の事を考えても、ギルドの事を考えても良い方法ではなかった。

「ナツも分かっている筈よね!? リサーナの時の事を忘れた訳じゃないでしょ!!」

『……帰る? エルフ兄ちゃん』

『逃げる! リサーナ!! !!』

2年前の悪夢がナツの脳裏をよぎる。ナツは拳を握り、俯いた。重苦しい雰囲気にも包まれる。沈黙を破ったのはポーリュシカだった。

「……その辺で全員帰りな。辛気臭い顔も、怒鳴り声も病人には毒だよ」

一方、その頃。

幽鬼の支配者・本部。ここにジョゼはいた。椅子に座り、考え込む仕草をしているように見える。周りにはエレメント4と右の首筋に傷跡があり、鍛え上げられた肉体を持つ褐色肌の男が立っていた。

「流石は煉獄のアルトリスというべきですか……まさか私がやられるとは」

苦々しく呟くジョゼに対し、黒髪に紫色の目をしたその男　タイタンは嘲るように笑った。

「貴様ら魔導士も大したことないな。今のあいつにすら勝てないなんてな」

彼の言葉を聞いたエレメント4の面々は殺気立ち、睨み付けるが、気にした素振りも見せずにも尚も言葉を重ねる。

「貴様……！！　マスター・ジョゼを侮辱するつもりか!？」

「一つ忘れてないか？オレがこいつを助けなきゃ、死んでたんだぞ？それにあいつに手を出さなって言ったのに手を出しやがって……」

丸い玉を見せ、タイタンは言う。殺気立つエレメント4を制したのはジョゼだった。

「それはすいませんでした。タイタンさん……しかし、あなたでも彼は倒せないでしょう？」

「どうだかな。アルトリスはオレがやる。手エ出すなよ」

妖精の尻尾 vs 幽鬼の支配者

アルトリスが倒れた日の翌日。ミラジェーンは朝早くからポーリュシカの元を訪ねていた。

「……アルトリスの容態はどうですか？」

「安心しな。もういつ目が覚めてもおかしくなくらいに回復してる」

ポーリュシカの言葉にミラジェーンはホッと胸を撫で下ろす。しかし、ポーリュシカの顔色は優れない。

「そうですか……！ 良かった」

「それにしても呆れた回復力だね……」

普通の人間ならば生きられない。生命力を奪う魔法を浴びて、生きるのは不可能だ。しかし、アルトリスがその不可能を覆す事ができたのは強靱な精神力と常識はずれの生命力ゆえか。それとも体内に七つの心臓を有する特異な体だからか。深く考え込むポーリュシカはミラジェーンがまだこの場に留まっている事に気がつく。

「いつまでいるつもりだい？ 私は人間が嫌いなんだ。さっさと出て行きな！」

「ポーリュシカさん。ありがとうございます！」

「ふん。早く行きな」

一方、マカロフらマグノリアにいる妖精の尻尾フェアリーテイルの面々は広場に集まっていた。広場にある大樹に磔にされたチーム・シャドウギアの三人。自分達がやったのだと誇示するようにレビィの腹部には幽鬼の支配者の紋章が描かれている。

「ギルドの酒場までなら我慢ができたんじゃないかな……」

確かに酒場は創設期から存在したいわばギルドの歴史。痛みも悔しさもあった。それでも堪える事ができたのはギルドという帰る場所を失う訳にはいかなかったからだ。だが、ギルドの仲間を傷つけられた以上、我慢する理由はなくなった。家族を傷つけるならば、家族を守る為に戦う。それが妖精の尻尾というギルドのあり方だ。

「……ガキの血を見て黙っている親はいねえんだよ」

「戦争じゃ!!」

オークの街にあるギルドファントムロード幽鬼の支配者。ここに妖精の尻尾は殴り込みをかけていた。

「……………くだらん……………」

魔法を使い、削り合う。質で勝る妖精の尻尾と数で勝る幽鬼の支配者。優勢なのは妖精の尻尾の方だった。大陸の中でも特に優れた10人の魔導士・聖十大魔道の一人に数えられるマカロフが最上階にいるであろうジョゼの元を目指し、戦線から離れてはいるが、エルザを中心として幽鬼の支配者を追い詰めている。

「これがこの大陸の聖騎士たち……………」

タイタンは腕を組み、梁の上から彼らが戦っている様を見ていた。

「そしてあれが竜の子か……………」

『ガジルー!!』

『サラマンダー!!』

一際、激しい戦いを演じているナツとガジルに目を向けて再び吐き棄てるようにくだらんと呟いた。

「アルトリス。お前の罪は重いぞ？」

建物が大きく揺れだした。途方もなく強大な魔力がその揺れを生み出していたのだ。妖精の尻尾は勝利を確信したかのような笑みを浮かべ、幽鬼の支配者はその魔力に怖れを抱く。

「何だあ!?」

「ほう……凄まじい魔力だ……」

タイタンは感嘆の声をもらし、小さな笑みを浮かべた。アルトリスの他に楽しみができたなと小さく呟き、腕を解く。

「これはマスターマカロフの怒りだ。巨人の逆鱗……もはや誰にも止められんぞ」

エルザが幽鬼の支配者の魔導士たちに向かってそう言い放つと上から声が聞こえてきた。何者かが上にいる。そう認識したと同時に自身の前に飛び降りてくる。

「……それは楽しみだ!!」

「貴様は？」

「オレの名はタイタン。アルトリスを殺す為に来た……聖騎士だ」
タイタンの言葉にエルザは端正な顔を歪ませ、剣先をタイタンに突きつける。ギルドの者を傷つけさせたりはしない。

「生憎、アルトリスはここにはいない。だが、お前があいつを殺すと言うならば野放しにはできんぞ！」

「ふん。暇潰し程度にはなるか……いや、貴様らを殺せばアルトリスは怒り、悲しみ、本気で来るか……」

エルザはタイタンの身体を見る。強く引き締まった体躯。溢れ出る魔力は強大で、アルトリスを殺すというだけの実力はあるとみた。体格からしておそらくはスピードはないが、接近戦が得意な格闘系の魔導士だろう。ならばと、自身の持つ鎧の中でも、特にスピードに優れた飛翔の鎧を換装する。獣耳のカチューシャを付け、豹柄の鎧を纏う。右手に剣を持ち、好機を伺う。

「はあっ！」

地面を強く蹴り、一瞬でタイタンとの距離をつめると剣を一閃。胸部めがけ、腕を振り上げた。

「軽いな……」

しかし、それはあっさり左手で止められてしまう。エルザが腕を押しても引いてもびくともしない。

「攻撃というのはこうやるのだ」

タイタンが右手でエルザの腹部を殴りつけ、尋常ではない痛みがエルザを襲う。右手から剣が落ち、腹部を押さえ、よろよろと後退する。

「たった一発でそのザマか……弱いな」

エルザはタイタンを強く睨みつけ、ぐっと体に力を入れる。

「……まだまだ！換装!! 天輪の鎧!!」

二対の翼をはためかせ、胸と臍を露出させた銀の鎧を纏い、無数の剣がタイタンに迫る。

「舞え！剣たちよ！サークル・ソード循環の剣」

しかし、それを僅かな動作だけで全てを躲しきり、両手に剣を構えて接近するエルザの攻撃さえも躲した。

「ブルーメンフラット天輪・繚乱の剣!!」

「ふん!!」

タイタンが合掌するとエルザの足元から地面が柱のように隆起し、上空に打ち上げられた。

「ぐああああ!! !!」

空中で体勢を立て直し、再びエルザは向かっていく。両手に持った剣をXを描くように振り下ろし、攻撃を仕掛けた。しかし、それに対してタイタンは横に動いて躲すわけでもなく、後ろに跳躍して躲すわけでもなく。ただ、その場に仁王立ちし、剣を受けた。

「はあっ!!」

「その程度か？」

エルザはタイタンの身体を見て、目を見開いた。タイタンは服が少し切れただけで、身体は傷ついていなかったのだ。

「……拍子抜けだな」

「くっ……」

タイタンがエルザの腹部に掌底を打ち込む。エルザの身体が揺れ、地面に落ちる。

「エルザ!! !!」

激昂するナツはタイタンに向かっていこうとするが、ガジルが行く手を阻む。

「このヤロー!!」

「お前の相手はオレだろ？サラマンダー」

タイタンは冷めた表情でナツ達を見ていた。明らかな動揺が妖精の尻尾の面々には生まれていた。妖精の尻尾の中でも指折りの実力者であるエルザがやられた事による怒り。戸惑い。不安。そういった感情を憶えた事だろう。実際、先程までと打って変わって、幽鬼の支配者が優勢になりつつある。

しかし、タイタンからすれば、どちらが勝とうがどうでもいいのだ。アルトリスは不在。戦いも暇潰しになるかと思えばそうでもない。これ以上やる意味はなかった。

「……つまらん……やはり貴様らを殺してアルトリスの闘志を煽った方が面白そうだ」

魔力を高め、球状に圧縮したエネルギー体を作り出す。エネルギー体は重力場を生み出し、タイタン以外の者たちを地面にめり込ませる。両手両足も使えない以上、抗う術はない。更にこれを全方位に向けて放出すれば辺り一帯を吹き飛ばす事ができるのだ。妖精の尻尾の魔導士が、この場にいる魔導士が生き残る確率は低いだろう。

「何て魔力だ……!? じいさんと同等……いや、それ以上か!!」

「消えろ。妖精」

涙のワケ

「……つまらん……」

不意にタイタンが魔法を消し、背中を向けた。それと同時に重力場も消える。何故タイタンが途中で魔法を消したのか。その疑問を打ち消すようにマカロフが天井を突き破り、落ちてくる。

「マスター!!」

魔力が消えている。マカロフの身体からはあの強大な魔力が微塵も感じられなかった。マカロフが倒れ、勢いづく幽鬼の支配者と士気の低下が著しい妖精の尻尾。このままでは全滅は必至。しかし、マカロフがエルザが倒れ、アルトリスら他のS級魔導士も不在。妖精の尻尾には組織を統率するリーダーがいなくなっていた。

「妖精をぶっ潰せ!!」

「くそっ!撤退だ!! 撤退するよ!!」

妖精の尻尾を纏めようとギルドの中でも古株のカナが声を上げる。カナの掛け声に反応したメンバー達がギルドを目指し、駆けていく。しかし、ナツやグレイを始めとして、戦いを続ける事を主張するメンバーもいた。

「んだと!? カナ!! オレはまだやるぞ!」

「ここは退くんだよ！マスターがやられちゃってんだ！早く診てもらわねえと手遅れになっちまう!!」

カナは声を荒げ、叫ぶように訴えた。それを戦いを続ける事を主張していたメンバー達も無下にする事はできず、背を向けてギルドへと向かう。

「くそっ！」

タイタンとガジル、アリアの三人は梁の上に立っていた。ガジルは妖精の尻尾が敗走する様を面白そうに眺め、タイタンに問い掛ける。

「おい、タイタンさんよお。どうするヨ？」

タイタンはあいつらをここで全滅させるのか。というニュアンスを含んだガジルの問いには答えず、アリアへと視線をやる。

「貴様らの目当てのルーシィ・ハートフィリアとやらは捕まえたのだろうか？」

タイタンはアリアから「本部に幽閉している」との返答がかえってくる、そこでやっとガジルからの問いに答えた。

「ならば、これ以上やる理由はないな」

アリアとタイタンはギルドの本部に帰るつもりのようなようだった。本音を言えば、サラマンダーと戦って優劣を決めておきたかったが、それはまたの楽しみにでもするかと思ひ直す。

「ガジルー!!」

同じ滅竜魔導士《ドラゴンスレイヤー》である以上、この会話が聞こえているのは分かっているし、妖精がどういう奴らなのかも分かっている。あいつが本部に来たら、この戦いの続きをすればいい。そう考えて、ガジルはこちらを強く睨みつけるナツに余裕の笑みを見せつけ、声をかけた。

「いずれ決着をつけようぜ。サラマンダー」

エルザは妖精の尻尾の地下で目を覚まし、エルザが起きた事に気付いたワカバが話しかけてきた。

「起きて大丈夫なのか？エルザ」

「ああ。手加減されていたようだ。痛みもない」

エルザは辺りを見渡し、ケガ人の多さやギルドに漂う空気の重さから、自分達が負けた事を察する。マスターの姿が見当たらない事を疑問に感じたが、カナの怒号にも似た声が聞こえ、そっちに意識が向く。

「これ以上の戦いは無理だ!!」

地下の一角で、グレイとカナが机を挟んで言い合いをしていた。妖精の尻尾では、やられた仲間達を想い、戦いを続ける事を主張するメンバーと戦いでを負傷者の数と戦力差を考え、犠牲者を出さない為に止める事を主張するメンバーとで考えが分かれていたのだ。

「ふざけんな!まだレヴィたちの仇もってねえってのに!!」

「だけど、これ以上はこちらの犠牲者を生むだけだよ。ミストガンとラクサスは不在……マスターとアルトリスは戦えない。それに対してあっちはマスターと同等の力を持つジョゼ。エレメント4にガジル。それにエルザを倒したタイタンって奴もいるんだ。戦力差がありすぎる。これでどう戦うっていうんだい!!」

カナの言葉に何も言い返す事が出来ない。明らかな戦力差を考えると、死に行くようなものだ。グレイは強く拳を握り、柱を叩いた。

「……くそっ!!」

「（……マスターが負けた？）」

エルザには信じられなかった。皆が嘘をついていると言いたいわけではない。しかし、マカロフを誰よりも慕い、信頼しているエルザには受け入れ難い事だった。放心状態のようになっていたエルザを引き戻したのは階段を降りてくる足音だった。敵が来たかと剣を構え、姿が見えるのを待つ。他の皆も同様に意識を階段に集中させる。

「何だ。お前らか」

現れてきたのはナツとルーシィ、ハッピーだった。彼らを見て、警戒を解く。どこへ行っていたのかとか、聞きたい事もあるが、今はこれからどうするかを決めなければならぬのだ。それは後でもいだろうと思っていた。

「とにかくこれからどうするかを話し合おう」

エルザがそう言った時だった。ルーシィの両頬を涙が伝う。嗚咽をもらし、取り乱したように謝罪の弁を述べる。

「ごめんなさい……みんな、ごめん……」

ジュピター

ハートフィリア財閥。鉄道会社などを経営している大企業だ。この財閥の長であるジュード・ハートフィリアの住まう屋敷。そこにライトという執事の青年がいた。燕尾服を着た、白のメッシュが入った黒髪と黒の瞳をした青年だ。汚れを付けないようにする為に白の手袋をつけている。温厚そうな顔立ちをした彼はジュードの書齋に入り、コーヒーを煎れる。

これはジュードにとって休憩の時間を意味する。しかし、彼の心が休まる事はない。幽鬼の支配者に娘の奪還を依頼してから既に一週間近くが経っている。そろそろ痺れを切らす頃だろうとは思っていた。

「ライト君。幽鬼の支配者からの連絡はあったか？」

「いいえ。まだありません」

その返答に対して苛立ちを隠せない様子のジュードは気を鎮めようとコーヒーを一気に飲み干した。

無理もない。ルーシィが戻って来なければ、ハートフィリア財閥は衰退してしまう。それを阻止しようと実の娘を道具のように扱う。ライトには理解出来ない事だが、これもまた人間だ。そう思い、ジュードの話に耳を傾ける。

「所詮は一介の魔導士ギルドか……」

「あそこには聖十大魔道のマカロフ。妖精女王のエルザ。それに何より煉獄のアルトリスもいますからね。一筋縄ではいきませんよ」

彼を倒せる者は幽鬼の支配者にはいないだろう。タイタンでさえも正攻法で勝つのは不可能だし、卑怯な戦いを嫌う彼がそんな事をする筈がない。今回の計画は失敗に終わるだろうというのが、ライトの予想だ。

財力でもって潰すのは現実的ではない。魔法評議会にコネクションを持たないジュードは魔法界からすればただの部外者でしかないのだ。フィオーレ王国1のギルドと言われる妖精の尻尾に依頼を回さないようにする事は難しい。だから幽鬼の支配者にルーシィを連れ戻すよう依頼したのだ。それが上手くいかないとすれば、どんな手を使おうとするのか。想像するだけ時間の無駄だろう。

「サワルー公爵との会談まで日数がない。急ぐように言ってくれ」

「はい。ジュード様」

アルトリスがそれを許す筈がない。

妖精の尻尾のメンバー達は一様に顔を顰め、怒りを露わにしていた。

「何て奴らだ！ルーシィを道具みたいに扱いやがって!! !!」

ルーシィは時折、声を詰まらせながらも幽鬼の支配者のマスター・ジョゼから聞いた事や自身の出自も含めた、今回の件に関する事をメンバーに話した。

「なるほど……大体の事情は分かった。アルトリスが関わっていた事には少々驚いているがな」

エルザは周囲にいるメンバー達を見る。ルーシィの話を聞いて皆に闘志がついたようだ。まだ問題はあるが止まるわけにはいかない。

「それでどうするんだい？あいつらはまたルーシィを狙ってやって来るよ」

カナが問いかける。先程まで戦うか、戦わないかで揉めていたのだ。そこを明確に決めなくてはならない。彼女の問いに答えたのはナツだった。

「決まってるだろ。ブツ飛ばす!!」

他の面々の表情からも迷いは感じられない。敵うかどうかは分からないが、仲間の為に戦うのが妖精の尻尾だ。戦わない選択肢はない。

「妖精の尻尾は仲間を傷付ける者を許しはしない。奴らがルーシーを狙って来るならば、迎え撃つまでだ!!」

そうなる問題は敵をどうやって倒すかだ。

「けど、どうするの？エルザが敵わなかったタイタンとマスターを倒したアリア。それにマスターと同じ実力を持つジョゼもいるわ」

ミラジェーンが挙げたこの3人が戦争を終わらせる上での障壁となるだろう。特にジョゼは幽鬼の支配者のマスター。彼を倒さなくては戦争は終わらない。そして、その前に立ちはだからであろうタイタンとアリアを倒さなくてはならない。

しかし、この3人を倒す事が出来る者がこの中にいるのかと聞かれれば、いないと答えるだろう。ナツを除いては。

「大丈夫だ！オレが3人ともぶっ飛ばせばいいんだろ？」

「じいさんが倒せなかった奴をお前が倒せるわけねーだろ！クソ炎！」

ナツの言葉にグレイが噛み付く。そして、それにナツが乗るのもいつもの事だ。しかし、今はタイミングが悪い。言い争いをしている場合ではない。

「んなの、やってみなきゃ分かんねえだろお？」

エルザが止めに入ろうとした時だった。上から自分達のよく知る声が聞こえる。

「心配ねーよ。アリアはエルザなら倒せるし、タイタンとジョゼはオレがやる……」

「アルトリス!!」

新しい黒のスーツに身を包んだ彼はゆっくりと皆のいる場所に降りて来る。戦況に関してポーリユシカから話を聞いていた彼は、意外にも皆の闘志が消えていない事に驚いていた。

「ジョゼとタイタンの二人を相手にするのはお前でも無理ではないか？」

エルザの言葉を聞いたアルトリスは不敵に笑う。エルザの言う通り、タイタンとジョゼは自分以外が相手にしても勝てる相手ではない。しかし、タイタンとジョゼを同時に相手にする必要はないのだ。頼れる仲間も密かに動いてくれている。勝率は高い。

「心配すんな。あいつらを同時に相手にしたりはしねーよ。ジョゼに関しては足止めをしてりゃあいい」

自身がタイタンに勝ち、エルザ達がエレメント4を倒してくれればベストだ。ジョゼは彼に任せればいいし、間に合わなければ自分が戦うだけ。アルトリスは既に腹を括っていた。

「間に合えばの話だけだな」

「……何だ!?」

地面が揺れる。アルトリスは無数の魔力を感知する。突如として現れたかのようにだった。幽鬼の支配者が仕掛けて来たに違いない。

「先手を取られたな……」

地響きの正体は分からないが、恐らく巨大な兵器だろう。急いで地上に上がるとそこにあったのは六足歩行で近付いてくる城のような建物。幽鬼の支配者の移動要塞型ギルドだった。

「移動要塞か……! 面倒なもんを引っ張り出して来たな」

アルトリスの後に続いて出て来たメンバー達も移動要塞型ギルドを目にして、驚きを隠せないでいる。だが、それだけで終わる筈がない。門の上から現れたのは砲口だった。砲口に魔力が充填されている。

「魔導収束砲ジュピター」

途轍もなく強大な魔力を弾丸の代わりにして放つそれは直撃すればギルドの周辺を破壊するだろう。

アルトリスは皆を守るべく前に出る。闇の魔力を身体に纏わせ、腕を交差する。

「お前ら!! 伏せる!! !!」

「無茶だ!! アルトリス!! !」

放たれた砲撃はアルトリスに直撃する。ジュピターを跳ね返すのは出来なくもない。しかし、周囲への被害を考えればそれは最善ではない。その為、アルトリスは無謀にもジュピターを受け止める。

「アルトリス!!」

ジュピターによる攻撃を凌いだアルトリスは膝から崩れ落ち、片膝をつく。すぐ様駆け寄るメンバー達。

「これって!?」

ジュピターの余波で上半身の服が消し飛び、宝玉が晒される。それに左腕に巻いていた包帯も消し飛んでいた。包帯で隠されていた赤い竜の紋様が顕わになり、ルーシィが目を見開いていたが、その事に気付く者はいない。

「……心配すんな……大した傷じゃねー」

アルトリスは自身の状態と戦況を分析する。上半身の服は見事に消え、魔力を消耗したものの魔力を纏っていた為、外傷はそれ程でもない。

だが、魔力の回復には時間がかかる。ジュピターの装填時間は15分と言われている。その短い時間でアルトリスがジュピターを破壊するのは難しい。何故幽鬼の支配者にいるかは知らないが、タイタンは生粋の戦闘狂。自身を狙うならば、そこに奴は現れる。そうなのはジュピターの破壊どころではない。

ーさてと。誰にジュピターを任せるかー

考えあぐねているとジョゼの声が拡声器越しに響く。

『ジュピターを防ぐとは流石はアルトリス。だが、これで貴様も戦闘不能。もう貴様らに凱歌は上がらねえ』

「何が言いたい!!」

エルザの問いかけにジョゼはドスの効いた声でルーシィの身柄を要求する。

『ルーシィを渡せ。今すぐにだ』

仲間達はルーシィを渡さないと口々に叫ぶ。その叫びを聞いているルーシィは震えていた。ギルドの紋章を刻んだ右手で目頭を押さえる。自身が原因で戦争が始まった事への負い目。自身を仲間と呼んでくれる事への喜び。

「渡せ!! !!」

しかし、だからこそ仲間をこれ以上巻き込みたくはないし、傷付く
のを見たくない。ルーシィは右手を下ろし、幽鬼の支配者の元へ行
く決意を固めた。

「ルーシィ」

アルトリスがルーシィの右手を掴む。とても険しい表情だった。彼
女は自身の考えが見透かされている気がしてならなかった。

「オレ達の誇りを仲間のお前が汚すな」

「でも、私のせいでこんな事になってるんだ!! 私が行けばみん
な傷つかないの!」

ルーシィの言葉をアルトリスは低い声で否定する。そこから見える
のは明らかな怒りだった。

「自惚れるな!!」

「ファントムはオレ達を潰す口実が欲しかっただけで、それが偶々
お前だったってだけの話だ」

アルトリスは表情を柔らかくし、話を続ける。ルーシィが何をしよ
うと戦いは止まらない。どちらかが勝者となり、どちらかが敗者と
なるまで戦いは続く。

妖精の尻尾のメンバー達が戦うのは仲間の為。その為に自身が傷つ

いても戦う覚悟を決めている。アルトリスはルーシィにも覚悟を求めている。

即ち、仲間が傷つく事に耐える覚悟だ。ルーシィが捕まれば妖精の尻尾の負けは濃厚になる。逆に言えば自身の身を守る事が仲間の勝利に繋がる。だからこそ、彼女は目の前で仲間が傷付こうとも耐えなければならぬ。

「仲間の為に戦う事がオレ達の誇りだ。それを踏み躪るんじゃないよ」

そう言ったアルトリスの言葉をジョゼは嘲笑う。

『めでたい奴らだ。その為に滅びの道を歩むか』

彼は勝利を確信している。妖精の尻尾を見下し、既にその頭の中では妖精の尻尾を滅ぼし、ルーシィを捕らえた後の青写真を描いている事だろう。だが、それを果たせる程妖精の尻尾は甘くない。仲間を想い、守る為に戦う時の妖精の尻尾は強い。そうアルトリスは確信していた。

「妖精の尻尾は滅んだりしねえ!! オレ達がお前らを潰してやる

!! !!」

『ならば更に特大のジュピターを喰らわせてやる!! 装填までの15分、恐怖の中であがけ!!』

『お前達の選択肢は二つに一つ。我が兵に殺されるか……ジュピターで死ぬかだ』

そう言うや、幽鬼の支配者からジョゼの魔法で生み出された幽霊の兵士幽兵^{シェイド}が次々に現れる。ギルド内部には多数の魔導士がいる筈だ。どうあってもジュピターに近付かせないつもりのようなようだった。

「兎に角、ジュピターを壊さないかね」

「オレがぶっ壊してくる！15分だろ？やってやる!!」

ハッピーに持ち上げられたナツはジュピターの破壊に向かう。それを見たグレイとエルフマンもギルドの足をつたって内部に侵入する。

「エルフマン！オレ達も乗り込むぞ！」

「エルザ」

それを見たアルトリスはエルザを呼ぶ。この場はカナが纏めてくれている。妖精の尻尾の中でも指折りの実力者である二人だからこそ出来る事がある。

「……動いて大丈夫なのか？」

「ああ。魔力を少し使っただけさ」

「それより……オレ達はオレ達で動くぞ」

アルトリスは黒いシャツと迷彩柄のジャケットを換装する。エルザ程ではないが、換装を使える彼はそれらを身に纏い、戦う準備を整えた。

「……何か考えがあるんだな」

ここで長々と説明している暇はない。アルトリスは幽鬼の支配者のギルドに向かいながら説明する事にした。

「ああ！早くこの戦いを終わらせねーとな」

ジュピター発射まで後14分

アルトリスvsタイタン

アルトリスは周囲を警戒しながら広大な部屋の中を神経を張り巡らせ、魔力を探りながら歩いていた。ナツに意識が向いている間に幽鬼の支配者内部の深くにまで侵入する事には成功はしたが、この建物の動力源はまだ見つかっていない。

その為、動力源の事はエルザに任せ、自身はジョゼとタイタンのいる最上階を目指している。既にジュピターは破壊したようだが、ジョゼとタイタンを倒さなければこの戦いは終わらない。それに先程の大きな揺れも気になる。各戦場の状況を把握したいところだ。

《こちらウォーレン。アルトリス、聞こえるか？》

その時、ウォーレンの声が脳内に響く。彼の魔法念話テレパシーは相手の心を読み、相手の心に直接語りかける事や他者の念を自身を介して相手に伝えることができる魔法だ。これで外の状況を把握することができる。

《ああ、聞こえてるぜ》

《拙い事になった！ファントムの奴ら、煉獄碎波アビスブレイクを発動するつもりだ!!》

煉獄碎波は禁忌魔法の一つ。それを使えるのはエレメント4の誰かかとあたりをつけるが、返って来た答えは少々予想外だった。

《なら、その魔導士を止めるしかねーな。誰がやろうとしてんだ？》

《……ファントムのギルドだ……》

《ギルドが魔導巨人になって魔法陣を描いていやがるんだ！もう時間かねえ。一刻も早く動力源を見つけて破壊してくれ！》

ウォーレンの言葉にアルトリスは押し黙る。今すぐにも魔導巨人を止めたいところだが、真上から感じる魔力は間違いない。タイタンのものだ。タイタンを相手にしながら魔導巨人を止めるのは不可能ならば、エルザらに動力源を発見してもらおうしかない。

《そうしてえけど、こっちも手が離せそうにねえ。エルザ達に伝えて動かしてくれ》

念話を打ち切り、後ろに跳躍してその場から退避する。その直後、アルトリスのいた場所の天井が円形にくり抜かれ、降り注ぐ。相変わらずの派手な登場の仕方だが、実力は本物だ。

「待ちくたびれたぞ!! アルトリスウウウッ!!」

「……久しぶりだな……タイタン……」

アルトリスはタイタンの魔力に違和感を覚える。かつてのタイタンとは魔力の質が違う。禍々しく、冷たい魔力。このタイプの魔力には覚えがある。復讐に身を落とした者達から感じるものだ。

「タイタンが復讐したいって奴はオレしかいねえか」

しかし、自分にはやらなければならない事があり、守りたいものがある。まだ彼の手にかかるつもりはなかった。

「この瞬間ときを持っていたぞ!! お前を殺すこの瞬間ときを!! !!」

「グラウンド・グラディウス
大地の剛剣!!」

動き出したのはタイタンだった。大地から隆起した地層が剣となり、アルトリスに迫る。それを躲しながら闇の魔力で12本の魔法剣を錬成していく。

「エルザ。技を借りるぞ……循環サークルソードの剣」

魔法剣を動かし、大地の剛剣を破壊しながらもアルトリスはタイタンに接近する。右手を固く握り、振り下ろす。

「はあっ!!」

タイタンは腕を胸の前でクロスし、アルトリスの拳を受け止めるが彼の重い一撃に後ろへ吹き飛ぶ。

「相変わらずの強さだな!アルトリス!!」

興奮した様子で叫ぶタイタンにアルトリスは攻撃を加えていく。彼

の攻撃を避けると同時にアルトリスの拳が鳩尾にのめり込む。

「ぐうっ!!」

更なる追撃を加えようとするが、岩石を盾にしてタイタンはその場を離脱。アルトリスと距離を取り、体勢を整えた。準備運動にしては激しい戦いだが、お互いにまだ本気には程遠い。

タイタンは巨人族。小人^{ドワーフ}という身体を小さくする魔法で人間サイズになっているが、本当の姿は10Mを超える大男。今のアルトリスでは元の姿になったタイタンを相手に苦戦は必至。そうなる前にタイタンを叩きたいところだったが、戻る素振りはない。何か策があるのか……油断はできないと気を引き締め直す。

「（何を隠してやがるんだ……）」

「12年前ぶりか……グリエニア王国を追放されてからの12年、色々あった」

タイタンの言葉にアルトリスは顔を歪ませる。同じ国で同じ主に仕え、同じ仕事をしてきた仲間を魔に墮としてしまった責任を痛感していた。

だからこそ、自分がここで止めなくてはならない。それがアルトリスなりの償いだからだ。

「オレを恨んでいるのか？」

「いや。お前には感謝しているさ。お前のおかげで新たな目的が来た。だからこそ、その礎になってもらう！」

タイタンは服に手を掛け、強引に破り捨てる。露わになったその身体を見たアルトリスは一瞬、目を伏せた。腹部に埋め込まれた紫色の魔水晶ラクリマから感じる魔力はとても禍々しい。これがタイタンの魔力を変異させていた正体なのか。

「その姿……悪魔に魂を売ったか」

「悪魔？そんな生易しいものではない。オレ達が求めているのは悪しき神の復活……」

その言葉にアルトリスは目を開いた。彼の狙いに気付き、表情を陰しくさせる。それは後悔からくるものではない。驚き、焦り、そして怒りが彼の中では渦巻いている。

「お前……まさか……魔神族を復活させるつもりか!?」

「そうだ。アルトリス……お前にも流れている魔神の血だ」

人間、巨人族、妖精族、女神族、魔神族

三千年もの昔、まだ大陸が分かれていなかった時代、この5つの種族は世界の覇権を巡り争っていたという。やがて女神族は巨人族・妖精族・人間と手を組み、魔神族と戦い、最後は魔神族が封印さ

れる事で戦いは終わりを迎えた。この戦いは聖戦と呼ばれ、人々に語り継がれている。

この話を知る者の多くは魔神族を憎み、恐れている。復活させようなど正気の沙汰ではない。アルトリスもまた、同じ魔神族としてその力を知るが故に彼らの復活を恐れている。復活すれば世界が滅んでもおかしくないからだ。

「お前、正気か……!! !? 魔神族を復活させれば三千年前の戦いが再び起きる! そうなったら、たくさんの命が消える!! いや、消滅さえ有り得るんだ!! !!」

「戦いなどこの世界の至る所で起きている。今、オレ達が戦っているようにな……今更魔神族が出てきたところでそれは変わらん」

「それにだ。オレ達には奴らを倒すだけの力がある。今はまだ未完成だが、完成すればこの力を凌駕するだろう。そうなれば魔神族を倒すのは容易い」

タイタンには魔神族を倒す自信があった。長年にわたる魔神族の研究によって彼らを倒す算段はついているのだ。だからこそ復活する為の準備に取り掛かるつもりだった。

「だが、その為には足りないものが幾つかあってな。その宝玉を渡してもらおうか」

「お前の企み知ってて、はいどうぞなんて言うと思ってんのか？」

「ならば力づくで奪うだけだ」

幾つかある封印の鍵の一つがアルトリスの首にある女神の宝玉。これを渡すわけにはいかない。それに仲間を守る為にもタイタンを一刻も早く退ける必要がある。あまり時間はかけられない。

「これからお前に面白いものを見せてやろう……!!」

あの魔水晶はただ禍々しい魔力を放っているだけではないようだ。タイタンの身体に痣が広がり、魔力が膨れ上がっていく。その魔力はジョゼに匹敵するか。

「はあっ！」

タイタンの拳がアルトリスを捉える。その重い一撃は腕によるガードをもとせず、アルトリスを吹き飛ばす。すぐに体勢を立て直し、タイタンの後ろを取る。力では及ばないが、速度ならば自分がか。反応出来ずにいるタイタンに獄炎を纏った拳を繰り出した。

「ぐっ……」

しかし、大地がそれを阻む。隆起した地層がアルトリスをなぎ払う。

巨人族の特長は大地との共生にある。大地の力を味方につけ、自由に操るのだ。身体を動かさずに大地を操り退けたという事はその動きを見極められていた事になる。大地は彼の魔力で動く。それを突

破するには追いつかない速度で動くか、大地ごと砕くか。

「流石の速さだ。だがオレには及ばんぞ」

「この状態じゃ分が悪いな」

どちらにせよ、このままでは分が悪い。タイタンの魔力は上がり、その力は強化されている。ならば、闇の魔力を使わないのは何故なのか。

「（戦闘狂のタイタンが新しい力を手に入れて使わない筈がねえ。って事は使えねー可能性もあるか……）」

「（まっ、どっちにしてもこの状態のタイタンの底は見えた……！
これくらいなら確実に勝てる）」

アルトリスは魔力を込め、魔神の力を解放する。右額に浮かぶ紋様がその証だ。この形態は魔力も身体能力も大幅に強化される。アルトリスはこれで一気に片をつけるつもりだった。

「オレは貴様をも超えた。何をしようと貴様の負けは変わらん」

「確かにお前の力は強くなった……その上であえて言ってやる。それでもオレには勝てねえ!!」

魔神化したアルトリスとタイタンの拳が激突し、タイタンが体勢を崩す。

「何だと……!?」

アルトリスの拳が鳩尾に入り、顎に吸い込まれる。反応する術なく、タイタンはされるがままだ。

「何故だ!? 何故オレが押される!?」

「何でオレに押されてるのか分かんねーって顔だな」

タイタンが距離を取ろうとするがすぐ様距離を詰め、獄炎を柱状に展開してタイタンを焼く。これで動きを止め、更に魔力を込める。

「単純な事さ。お前は魔神の力に耐え切れず、その力を落としてる。それじゃあ、オレには勝てねーよ!」

タイタンが巨人になって魔神の力を行使するならばアルトリスでも敵うかどうか分からなかった。しかし、そうしないという事は制御せざるを得ない状態にあり、これ以上の力の増幅はないとアルトリスは考えた。それが今のタイタンが見せた限界値。

そして、タイタンが獄炎を浴びて膝から崩れ落ちた隙を狙って魔水晶を抉り出す。

「まさか……オレがやられるとはな。しかもまだまだ本気ではない。流石と言っておくぞ。アルトリス」

「それはお前もだろ。わざわざこんな玩具をつけてきたのはオレに魔神族を本気で復活させるつもりだと知らしめる為。本当の力を出していればもっといい勝負になってたさ」

「だが、最後に勝つのはオレ達だ。この世界を手中に収め、望むがままの世界を創造する!! !!」

キナ臭い事になったものだ。妖精の尻尾と幽鬼の支配者との戦いで旧友に再会することになるとは想像もしていなかった。しかもあの魔神族の復活を企むなど。だが、こうなっては仕方がない。タイタンがこちらに刃を向けるならば迎え撃つまで。

「……魔神の復活を企む以上、また近いうちに会う事になるだろうぜ………本当の戦場だな」

闇祓う光

妖精の尻尾と幽鬼の支配者の全面戦争は最終局面に突入していた。エレメント4はナツ、グレイ、エルフマン、エルザにより撃破。彼らと生体リンクしていた魔導巨人も機能を停止し、煉獄碎波は不発に終わる。

ナツとガジルの滅竜魔導士対決はミストガンの助力もあってナツの勝ちで幕を下ろし、残るはジョゼのみ。彼と対峙するのはエルザだ。ジョゼの放つ魔力によって瓦礫が散見される。うつ伏せに倒れるグレイ、エルフマン、ミラジェーン。黒羽の鎧を纏うエルザだが鎧は綻び、肌の大部分が露出しており、鎧としては心許ない。

傷だらけになりながらも一振りの剣を構え、ジョゼに向かっていく。

「まだ立つか……妖精女王^{ティターニア}。アリアを倒しただけはある。ここまで持ち堪えるとは思いませんでしたよ」

「そんな魔導士がねえ……他にもいたとあっては気に食わないのですよ!!」

ジョゼの放つ魔法弾がエルザに直撃する。放たれた魔法弾に押され、そのまま壁に直撃する。

「……エルザ……!!」

エルザは剣を支えに立ち上がる。身体は傷つき、限界を迎えている。しかし、目はまだ死んでいない。強く輝いていた。

「お前の企みはアルトリスから聞いた。私達よりも優れていると証明する為……ルーシィを人質にハートフィリア財閥から金を搾取して勢力を拡大する為……」

「お前の醜い欲望の為に妖精の尻尾も幽鬼の支配者も……多くの者が血を流したんだ!! 涙を流した……! お前に彼らの痛みが分かるか!! ジョゼエ!!」

自分のせいで仲間が傷ついたと自らを責めるルーシィ。ガジルによって痛めつけられ、見せ物にされたレビィ、ドロイ、ジェット。彼女達以外にも戦争で多くの仲間が傷付いた。

「全ては幽鬼の支配者が栄華を極める為だ」

そして同時に幽鬼の支配者も多くの魔導士が傷つき、倒れた。彼らはギルドの為に戦ったというのにジョゼは顧みようもしない。彼らの献身を讃えるわけでもなく、そうする事が当然だと言うかのような振る舞い。

「貴様だけは!! !!」

ジョゼにだけは負けたくない。その一心で剣を振るう。しかし、魔法で作り出された障壁が剣を受け止める。しばしの膠着の後、反発した力によって後ろに弾き飛ばされる。

「私と貴女の実力差は歴然です。そして既に体力も限界でしょう。貴女に勝ち目はない」

「何があるうとも貴様だけは必ず斬る…!!」

強い意志のこもった瞳がジョゼを映す。その瞳をジョゼは直視出来なかった。「恐れ」 ジョゼはエルザに畏れを覚えていた。

「まあいいでしょう。今樂にして差し上げましょう。さようなら、妖精女王!!」

それを振り払うように右手人差し指から魔法光線が放たれた。エルザは躲そうとするが、意思に反して身体は言う事を聞かない。全身から力が抜けたかのように膝から崩れ落ちる。身体は既に限界を超えていたのだ。

「エルザ!! !!」

そうする間にも魔法光線はエルザに迫る。咄嗟に目を閉じてその時を待つが、自身の身には何も起きなかった。瓦礫の崩れる音が聞こえて目を開いた時、目の前にはエルザが敬愛する親の姿があった。

「マスター!!」

温かい魔力が感じられる。紛れもないマカロフの魔力だとすぐに察知した。

「全員この場を離れよ」

グレイに肩を貸してもらいながら、エルザはその場を去る。この場に残っているのはマカロフとジョゼだけだ。

「こうして直接会うのは6年ぶりですねえ。私としては早くルーシィを差し出して欲しいのですがね」

互いに多くの感情を抱えている。片や怒りと嫉妬、羨望。片や怒りを覚えながらも憐れみ、失望の念を感じてもいた。

この戦いが妖精の尻尾と幽鬼の支配者の最後の戦いになるだろう。墮ちるのは妖精か、幽鬼か。未来はこの二人の戦いに委ねられた。

「不甲斐ない親共のせいでガキ共の血が！涙が流れた！この先、ワシと貴様以外が傷つくことはない！！」

聖十士の戦いは天変地異を起こすと言われている。無論、実際に起こるわけではないがそれだけの強大な魔力を持つ事は紛れもない事実である。そして、戦いが長引く事はない。二人共、短期決戦で勝負を決めるつもりでいた。

「天変地異を望むか」

「それが家族の為ならば」

上層階では今まさにマカロフとジョゼによる最終決戦が繰り広げられている。その二人の魔力は大気を震えさせる。これだけの魔力の持ち主がぶつかるのだ。戦いが長引く事はないだろう。もしも戦いが長引くようならば膠着状態に陥る。魔法評議会の介入による混乱、第三勢力の乱入。ギルドメンバーの肉体的精神的疲労。考えられるものは幾つかあるが、戦いが長引くのはどちらにとっても避けたい事だ。

そんな中、アルトリスは瓦礫に腰掛け、マカロフとジョゼの戦いに決着がつく時を待っていた。

「何とか間に合ったみてーだな」

音もなく現れてのは頭にバンダナを巻き、口元を迷彩柄の布で覆い隠した男。名をミストガンという。妖精の尻尾のS級魔導士の一人に数えられる魔導士だ。

「ああ。時間は掛かってしまったがマスターの魔力は全て回収した。間もなく戦争は終結する」

床に散らばる布には幽鬼の支配者の紋章が描かれている。ミストガンは大気に散らばったマカロフの魔力を回収する傍ら、幽鬼の支配者の支部を一人で潰して回っていた。

ミストガンはギルドを訪れる際、必ず魔法で皆を眠らせてしまう。その為、彼の顔を見た事があるのはマカロフ、アルトリス、ラクサス、ギルダーツの四人だけだ。中でもアルトリスはミストガンと仲が良く、偶にこうして顔を合わせ、情報交換する事がある。

「この局面においてはな。けど、まだ根本的な解決にはならねーよ。ファントムでダメなら次は闇ギルドに依頼してもおかしくねー」

「そこまでやるのか？ ジュード・ハートフィリアという男は」

ハートフィリア財閥を立ち上げ、一代で大企業にまで押し上げた手腕。今やジュードを成り上がり者と見くびる者はいない。しかし、そんな彼にないものはコネクションだ。反面、サワルー公爵のジュレネール家には公爵家としてのコネクションがある。それに見合った財力も持ち合わせている。

「ルーシィが結婚させられそうになってるジュレネール家は強大な力を持っている。ハートフィリア財閥以上にな」

「なるほど……ルーシィが戻らず、婚姻が果たせないとすれば」

ミストガンは最後まで言葉を紡ぐ事はしなかった。アルトリスも言う気にはなれない。

「……ルーシィには悪いけど……どうしてやる事もできねえな」

「近い将来、ハートフィリア家の財産はジュレネール家の物となる」
その事を声にして言う気にはなれないのだ。

一方のマカロフとジョゼの戦いは一進一退の攻防を繰り返していた。両者ともに左肩に傷を負った以外は目立った外傷はない。魔力の量だけで言えば互角か。ここからギルドの様子を伺う事は出来ないが、あそこにはジョゼの魔法で生み出された幽兵シェイドが妖精の尻尾の仲間達を襲っていた。マカロフとしては時間をかけたくはなかった。

「大したモンじゃ。その若さでその魔力。聖十の称号を持つだけはある」

「その力を貸して正しいことに使い、若い世代の儀表となっておれば魔法界は更に発展したであろうに」

もしもその力を他者の為に使える人物であったならば……。そう思わずにはいられない。

「説教……ですか？」

「まあ良い。今更貴様を許すつもりはない」

しかしもう遅い。ジョゼはあまりに多くの者を傷つけ過ぎた。妖精の尻尾の仲間を傷つけ過ぎた。もう彼にそんなもしもの未来が訪れる事はない。

「妖精の尻尾審判のしきたりにより貴様に3つ数えるまでの猶予を与える」

「跪け」

マカロフはジョゼに最後の通告を与える。

「1つ」

「何を言い出すかと思えば跪けだァ!?」

「2つ」

マカロフは両手の間に魔力を集中させる。妖精の尻尾に伝わる奥義と呼ぶに相応しい魔法で決着をつけるつもりだった。

しかし一方のジョゼも黙って見ているわけではない。禍々しい、怨霊のようなエネルギーを右手に集める。

「王国一のギルドが跪けだと!? 冗談じゃない!! 私は貴様と互角に戦える!! いや、非情になれる分私の方が強い!!」

「3つ」

「今すぐルーシーを差し出し、私の前に跪け!! 妖精が墮ち、鬼の支配者の時代が始まるのだア!!」

マカロフが両掌を合わせ、妖精三大魔法の一つに数えられる魔法術者が敵と認識した者のみを滅する妖精の法律フェアリーロウを発動させた。

「妖精の法律…発動!!」

魔導巨人を中心にマグノリアを温かい光が包み込む。戦いの勝敗が決した瞬間だった。

居場所

敵と認識した者だけを滅する超魔法「妖精の法律。眩い光を放ち、ジョゼの幽兵を消滅させていく。そして、その光を間近でくらったジョゼの髪や髭は白く染まり、その顔から生氣は感じられない。

「2度と妖精の尻尾に近付くな」

生きているのはジョゼの持つ強大な魔力ゆえか。はたまたマカロフが加減をしたからか——しかし、最早ジョゼに戦う力はない。この戦い、妖精の尻尾の勝利である。

「ここまでハデにやらかしちゃあ、評議院も黙っておらんじゃろ。これからはてめえの身を心配する事だ。お互いな」

満月と満天の星空が輝く午後10時。妖精の尻尾ギルド跡地にいるのはアルトリスただ1人。地下で酒飲みに興じる者達もいるがその輪には入らず、地面に座り、酒樽を口に運ぶ。幽鬼の支配者との抗争ではボロボロになりながらもその形を保っていたが、損傷が激しく修理までに時間がかかると判断された。

「……ぶはっ……！」

その間に妖精の尻尾のメンバー——特にナツが壊さずにいるのは不可能に近く、取り返しのつかない事態になる事も考えられる。その為、マカロフの手によって創設時より1世紀近くにわたって妖精の尻尾の成長を、冒険を見守ってきたギルドの酒場はその役目を終え、今は新たにその役目を担ってくれる酒場を新築する計画が立てられようとしている。

なお、今まで数多くの建物を破壊しているナツが最後まで抵抗していた事がアルトリスには可笑しくてしょうがなかった。これを機に破壊行為が無くなってくれるといいのだが、それは期待するだけ無駄というものだろう。

「さてとこれからどうっすかなあ」

タイタンが語った話を思い出していた。奴らはまた魔神族を復活させる為にアルトリスの前に現れるだろう。それを阻止する為に自分がどうすべきなのかは分かっている。踏ん切りがつかないのは妖精の尻尾を今離れるわけにはいかないからだ。

幽鬼の支配者との抗争が終わったとはいえ、問題は解決したわけではない。それにナツを始めとした問題児がいる。ここを離れる事に不安を覚えているのは確かだ。しかし一番の理由は……

「どうした？ミラ……」

いつの間にか地下から出て来て、自分の背中にピタリとくっ付いてきたミラジェーンを悲しませてしまおう事か。あの国において自分は大罪人。2度と妖精の尻尾には戻れない。

「アルトリスが生きてる事が嬉しいの。本当に怖かった……リサーナみたいになくなるんじゃないかって」

2年前にリサーナを亡くし、それ以来そのトラウマから魔法が使えなくなったまま。しかし近い将来、そんな彼女を置いて自分は必ずあの国に戻る。今生の別れとなるだろう。しかしその事が分かっているながら嘘を吐く。

「何があってもオレは死なねーよ。必ず生きてお前の元に帰って来る」

「うんっ……」

嘘吐きと言われるだろうか。悲しむだろうか。嫌われるだろうか。だが、それはいずれ彼女の為にもなる。悲劇が生まれる事はない。

「アルトリス？」

「……何でもねーよ」

物思いに耽ってしまっていたようだ。今はまだ悟られるわけにはいかない。作り笑いを浮かべたアルトリスは酒樽の中に入っている酒を飲み干すとゆっくりと立ち上がる。

「もう時間も時間だし、送ってく」

「ありがとう♪ アルトリス！」

アルトリスはミラジェーンの左手を取り、2人の影は街中へと消えて行く。

妖精の尻尾と幽鬼の支配者の抗争が終結してから6日目の午前11時。依然としてルーンナイトはこの街に駐屯地を設置しているが、今日の午前で取調べは終了する。

相変わらずナツが暴れ、グレイが突っ掛かって喧嘩が始まる。そこに他のメンバーも加わって騒ぎはどんどん大きくなっていく。そしてその喧嘩をエルザが止める。

「いや〜！ギルド解体して正解だったな」

「ふふ！そうねー！」

どんちゃん騒ぎを眺めていたアルトリスだったが、街の方が俄かに騒がしくなっている事に気付く。こちらに近付いてくる馬の蹄が鳴る音。それと同時に懐かしい魔力を感知していた。

「何だか外が騒がしいな」

「いんや。うちに客みたいだぜ」

ギルドの前で止まった馬車の中から現れたのはジュードだ。後ろから追いかけて来た馬車からはライトと数人の執事が降りて来た。アルトリスが対応をすべく入り口に向かえば、旧知の仲であるライトがこちらに駆け寄って来る。

「やあ、久しぶりだね。団長。12年ぶりかな？」

ライトが右手の手袋を取り、握手を求めてくる。手の甲には人魚の刻印があった。懐かしさが込み上げて来るが感傷に浸っている場合ではない。アルトリスも右手を出し、握手を交わす。

「ああ。久しぶりだな、ライト」

ここからが本番だ。ジュードは今回の件の元凶とも言える人物。口くいな事にはならないだろう。

「紹介するよ。彼は僕が執事として仕えているハートフィリア財閥の社長。ジュード・ハートフィリアだ」

ナツが後ろから騒いでいる声が聞こえる。後ろを向けば血走った目でこちらに近付こうとしているのを近くにいたエルフマンとグレイが止めているようだった。すぐに騒ぎを止めようとエルザにアイコンタクトを取り、ナツを沈めてもらう。

「悪いな。オレはアルトリス・ベルジュラック。妖精の尻尾へようこそ」

気を取り直してジュードと向き合う。執事5人の手にはアタッシュケースがそれぞれ2つ。すぐに大体の察しがついた。

「（まっ、いかにも財界の奴らがしそうな事だな）」

「君がアルトリス君か。娘がいつも世話になっているようだね」

「いんや？むしろアンタの方に世話になったからそっちは気にすんなよ」

つい皮肉を言ってしまったが、本人も気にした様子を見せていないし、これくらい構わないだろうと自分を納得させる。

「ここに10億ある。大人しく娘を渡して貰えるかい？」

「断る」

にべにもなく切り捨てる。お金が貰えるのは魅力的だが、メンバー

を渡さなければならぬとなると話は別だ。とはいえ用意されているお金は治療費とギルドの損害賠償として後程きっちり回収するつもりだ。

その算段を立てるアルトリスはひとまず落ち着いて話せる場所に行こうと考えた。ギルドの椅子は酒樽。招かれざる客人とはいえ客人は客人。それに座らせるわけにはいかないだろう。

「まあ、まずは腰付けて話し合おうぜ？話はそれからだ」

「ここじゃあ、解体したばっかでロクにもてなせねーし、落ち着いて話も出来ねーからな。オレン家に行こうか」

ギルドから少し歩く事になるが仕方あるまい。ミラジェーンに鍵を渡し、自身は町長の元を訪問しているマカロフを迎えに行く。また、ハッピーにはルーシィを連れて来るように頼んだ。

「ミラー！2人を案内してやってくれ。オレはマカロフを連れて来る」

「はい」

「ハッピーはルーシィの取り調べが終わったらオレン家に連れて来てくれ」

「あいさー！」

慌ただしい1日になってしまったがこれはこれで好都合。ここで問題にケリをつければ危害が及ぶ事はない。

「さて……！ どうすっかな」

高級ソファーに座って向き合うジュードとマカロフ。お互いに笑顔こそ浮かべているが空気は重苦しい。2人の後ろにはアルトリスとライト、ミラジェーンが控えている。執事の方々には別室で待機してもらい、この場にいるのは5人だけ。まだハッピーとルーシィは到着していない。

「それで娘のルーシィを引き取りに来たのですが、そちらの返事をお聞きしたい」

「あ。その件でしたらワシらの答えは決まっておるわい……」

マカロフの穏やかな表情が一転。修羅の如き形相に変わる。

「家族を渡すバカがどこにいる！！！！」

「それでは……このギルドを財力を持って潰しますがよろしいかな？」

ヒートアップしていくマカロフとジュード。実力行使で止めるわけ

にもいかず、どうするかと考えあぐねていると、勢いよくドアが開けられる。

「アルトリス！連れて来たよ〜！」

ハッピーがルーシィを連れて来てくれたのだ。飛ばして来たのだから、肩で大きく息をしていた。複雑そうな表情でルーシィはジュードを見ている。

「……パパ……」

「ありがとな。ハッピー」

「はぁ……あい……」

ハッピーを腕に抱くと、ルーシィに視線をやる。心の準備が出来ていないか。だが、後回しにするのは不可能だ。アルトリスは言葉を発し、舞台を整える。

「さてと、妖精の尻尾としての意思は伝えた。ジュード・ハートフィリア……あんたの意思も分かった」

「後はルーシィがどう考えてるかってだけだな」

「ルーシィの思いの丈をぶつければ良い。後はワシらが何とかするからのお」

アルトリスの言葉を引き継ぐようにマカロフがルーシィに優しく声をかけた。躊躇うように、しかし強い決意をもってルーシィはジュードに自分の意思をぶつける。

「お父様。何も告げず家を出た事は間違っていました。それについては申し訳ありませんでした」

「けど、あたしはお家には帰らない!!」

「だってここにはあたしの事を認めてくれる人達がいるから!綺麗な服を着れるわけじゃないし、家賃を払えるか不安だったりでお金はあまりないけど……妖精の尻尾には私の欲しかったものがあるの!」

財閥の娘であるルーシィは家にいけば綺麗なドレスを着る事ができる。何不自由ない生活を送る事が出来る。

「欲しかったものだ……?」

だが、本当にルーシィが欲しいものはお金では買えないもの。かつてはジュードもそれを理解できた筈だ。だが、今は理解する事が出来ない。7年前に妻を亡くした時から彼の歯車は狂い始めていた。

「家族。貴方よりずっと温かいもう一つの家族。それが妖精の尻尾なの!」

「僅かな間だけママと過ごしたあの家に戻れないのは辛いし、ライトさんやペットさん、ペロ爺……リボンさん……エイドさん……」

…みんなと別れるのもとても辛いけど……でもママが生きてたらあなたのやりたい事をやりなさいってそう言ってくれると思うの」

「だからあたしはあたしの道を進む！人に決められた結婚もしない！！
そして二度と妖精の尻尾には手を出さないで！！！！」

ジュードは大きな動揺を見せている。尋常ではないが、ルーシィは母のレイラを感じさせる顔立ちをしている。それを鑑みれば彼の動揺も得心がいく。

「さよなら、パパ」

何も言えずにいるジュードに目もくれず、ルーシィは部屋を出る。放心状態となったジュードは崩れ落ちるようにソファ―に座る。そこにマカロフが歩み寄る。

「これ以上言いたい事はありますか？」

「確かにお前さんはルーシィの父親じゃ。だが、子供は親の道具ではない。ガキにはガキの人生がある！！
間違ってもそれを踏み躪るような事をしてはならんじゃあ！！！！」

「そして、覚えておけい！！
次、妖精の尻尾に手を出した時はルーシィの父親と言えどギルドの敵じゃあ！！
容赦はせん！」

なお、アルトリスは目論見通り10億円を手に入れる事に成功した事をここに追記しておく。

午後2時頃。2つの馬車はマグノリア駅に向かう準備を整えているところであった。準備が整うまでの時間、アルトリスとライトは玄関前で話し込んでいた。

「何だか意気消沈してるよ。ルーシィちゃんはレイラさんに似ているからそれもあるのかもね」

「これからどうするつもりだ？」

「財閥が無くなるまではそばにいるつもりさ。餓死しそうなところを助けてもらった恩もあるしね」

ライトにとってハートフィリア家は恩人。最低限の義理は果たすつもりだった。

「気をつけて帰れよ」

「僕に傷を負わせられる魔導士は少ないと思うよ？」

「それもそうだな！」

気がかりなのはむしろアルトリスの方だ。彼が王国と戦うにはまだ幾つかの枷がある。それを外さなければ彼は戻りはしないだろう。

「団長こそ気をつけた方が良い。王国は君の持つ女神の宝玉を狙っている。タイタンが王国についた理由は分からないけど……きっとまた君の前に現れる」

「王国へ戻る時も近いんだ。今のうちにミラジェーンさんと別れる覚悟を決めておく事だよ」

ライトの警告にアルトリスはバツの悪そうな表情を見せた。出来る事なら気付かないでいてもらいたかった。それが彼の本音だろう。

「……気付いてたのか……」

「少し前に雑誌でね。驚いたよ、死んだ筈の彼女が生きていたのかとさえ思った」

「君が愛した王国の王女と瓜二つの風貌に名前まで同じミラジェーンときた。まるで運命の悪戯だ」

12年前に死んだ筈の王女の生き写し。ミラジェーンと王女には何か目に見えない繋がりがあるのだろう。それを詮索するつもりはない。恐らくはアルトリスの罪と関係する事だからだ。互いの罪に不干渉を貫くのが彼らの掟の1つ。何も言わずにおくつもりだった。

「あいつには言うなよ」

「分かってるよ。じゃあ、またね。団長」

馬車に荷物を積み終わったようだ。ライトは馬車に乗り込み、暫しの別れを告げる。

「ああ、またな」

「僕達には君が必要なんだよ。アルトリス」

「ねえ、ミラージェーン……?」

結成!! 最凶チーム!!

ジュード・ハートフィリア凸事件（命名アルトリス）から数日。妖精の尻尾は新たな酒場の建設を開始していた。とはいえクエストの度に問題を起すメンバーが多く、賠償金の支払いが嵩む今日のごろ。少しでも経費を低く抑えたかったマカロフらは自分達で新たな酒場を建てる事を計画。幸いにも反対するメンバーはおらず、むしろノリノリで参加してくれた。

なお、この機会に物の大切さを覚えて物を壊さないようになって欲しいとアルトリスは考えるが、それが叶う可能性は低いだろう。

そして本格的に工事を開始してから2日目。クエストの掲示板が新たに設置され、またクエストの受注を担う仮設の受付カウンターが完成した事でクエストの受注が再開された。

「みんなー!! 今日から仕事の受注を再開するわよー! 仮設の受付カウンターだけどガンガン仕事やるーねー!!」

ミラジェーンの言葉を聞いたメンバー達は雄叫びをあげ、クエストの依頼書が貼られた掲示板に我先にと駆け寄る。その様子を仮設カウンターで飲み物を飲んでいたルーシィが呆れたように見ていた。

「なにアレ……いつもはダラダラお酒飲んでるだけなのに」

「本当になく。もう少しダラダラしたってバチ当たらねーのに」

積み重なった角材の近くで瓶丸々1本の酒を飲んでいたアルトリスの足元には酒樽と瓶がいくつも転がっている。ダラダラするにも限度があるだろうとルーシィのツッコミが炸裂する。

「あなたは飲み過ぎよー!! !!」

「そうかぁ？まだ序の口だぜ？」

あれだけ飲んで平然とした顔でいるアルトリスにルーシィは苦笑を禁じ得ない。ハッピーやグレイらの話ではクエストであまりギルドにはいないというが、今の姿はその逆。ダラダラと歩いて、仕事に行く様子を見せない。

「アルトリスさんは仕事行かないんですか？」

「しばらく仕事しねーとさ、仕事行くの怠くなんだろ？つまりはそういうこった」

「あはは。アルトリスさんお金の心配とか無さそうですもんね」

ルーシィの言葉にアルトリスは苦々しい表情を見せる。その理由は自分ではなく他人の問題でお金が滝のように消えていくのが原因である。

「……6月に預金2億あったのが今は5千万だぞ。しかも仕事でプラスされてそれだからな。1億5千万以上は確実に消えてんだ」

「最近はずつと物が壊す事が多かったものね……」

幾つかの口座に分けているから問題ないと言えないのだが、このペースでいくと底をつくの5年はかからないか。

ここ最近でナツが壊した物は定例会場全壊。ハルジオン港半壊。ルピナス城の一部損壊。フリージアの教会全焼。ナズナ溪谷観測所崩壊による機能停止。民家7軒壊滅。チューリィ村の歴史ある時計台倒壊と数え出せばキリがない。兎に角、ナツの弁償代や賠償金だけで相当な額の金額を支払っているわけだが、ここから更に他のメンバーの失態による賠償請求や弁償代が加算される。その額は幾らになるのか考えるだけで恐ろしい。

「もしかしてアルトリスさんが賠償金とか全部支払ってるんですか？」

「正確にはオレとマカロフな。あ！この事は誰にも言うなよ。特にエルザ」

妖精の尻尾の資産だけでは支払えず、マカロフも自身の貯金から支払ってはいるがマカロフ1人に支払わせては破産も時間の問題。その為、アルトリスが一部を肩代わりしているわけだが、払っても払っても次が来るのである。

「（またヤジマさんに高額クエスト紹介してもらわなきゃな）」

この数年はマカロフの旧友でもあるヤジマという評議院議員に頭を

下げて高額クエストを貰う日々。妖精の尻尾のS級クエストと掛け持ちしている為、まともな休みが取れたのは幽鬼の支配者との抗争で手に入ったこの休みだけである。もちろん、その休みもまともに休めているとは言い難いのだが今までよりは何倍もマシなのが現状だ。

閑話休題

アルトリスが先行きに不安を感じていると、エルザの怒鳴り声が聞こえる。その相手はラクサスという雷の魔導士。妖精の尻尾にいるS級魔導士の1人だ。かつてはアルトリスと共にチームを組んでいて、その成長ぶりには目を見張るものがあった。

「もう一度言ってみろ！」

「この際だ…はっきり言ってやるよ。弱エ奴はこのギルドには必要ねえ」

だが、この男は実力主義の考えが強く、弱い者は妖精の尻尾には必要ないというある種の選民思想の持ち主でもある。もちろん、妖精の尻尾への愛というものが様々な要因が積み重なって屈折していった結果ではあるのだが、ともあれ彼はギルドメンバーから煙たがられる存在なのだ。

「ファントム如きに嘗められやがって恥ずかしくて外も歩けねーよ」

「元はと言えばオメーらがガジルにやられたんだって？つーか名前も知らねーや。誰だよ？」

「情けねえな、おい」

ラクサスはレビィ、ジェット、ドロイの3人「チーム・シャドウギアを口撃する。とはいえ、正論と言えば正論の言葉に3人は黙るしかない。自分達の実力の無さを痛感しているのはこの3人なのだから。」

「酷いことを」

「これはこれは元凶のねーちゃんじゃねーか」

ラクサスはシャドウギアからルーシィに標的を変更し、口撃しようとするが、その前にミラジェーンがカウンターを強く叩き、それを防ぐ。

「もう全部終わったのよ。誰のせいとかそういう話だって始めからないの。戦闘にも参加しなかったラクサスにもお咎めなし。マスターはそう言ってるのよ」

「そりゃそうだろ。オレには関係ねえ事だ。ま……オレがいたらこんな不様な目にはあわなかったがな」

この男は自分の強さに自信を持っている。アルトリスが彼とチームを解消したのが5年前。それから何かを探しているという話だったが、それは見つかっているのか。どちらにせよ、今の彼がこれ以上の力を持つ事は避けたいところであり、見つからない事を願っているのだが。兎にも角にも心配の種が尽きる事はない。

「ラクサス!! てめえ!!」

怒りのままにナツが殴りかかるがラクサスは雷のように一瞬で移動してそれを躲す。もちろん、それはナツの怒りを助長させるのだが、ラクサスは彼の事など眼中にない。

「勝負しろよ!! この薄情モンがああ!! !!」

「お前はと思うよ?アルトリス」

ラクサスの目が映すのはアルトリスだけだ。面倒な事に巻き込まれたという気持ちもあるが、ラクサスをこのまま良い気にさせたくのも癪ではある。

「……弱かったら何も守れねーのは確かだ。そういう意味じゃ腕っ節の強さは必要だ」

ラクサスの顔が勝ち誇ったような表情に変わり、四方八方から視線が痛く突き刺さる。特に後ろからの視線は強烈だ。かつての魔人と言われた頃を思い出させる。

しかし、本当に言いたいのはこれからだ。アルトリスは視線を無視して言葉を紡ぐ。

「けど、強さにも種類がある。腕っ節の力で他者を振じ伏せても心からついてくる奴はいねーよ。必要なのは他者を守ろうとする強さだ」

突き刺さるような視線が霧散する。代わりにラクサスの顔が苦々しく歪むが、アルトリスにとっては気分が良いものだ。久方ぶりの昼間からの酒を邪魔した罪は重いのである。愉悦に浸り、瓶を口に近づける。

「相変わらずな奴だ。いいか？オレがギルドを継いだら弱エもんは全て排除する!! 齒向かう奴もだ!! 最強のギルドをオレが作る!! 誰にも嘗められねー最強のギルドだっ!! !!」

「その時にお前とオレ。どっちの考えが正しいか思い知らせてやるよ」

「それは無理だと思うぜ？何たってオレ達は似たもん同士だからな！」
今の発言の何が面白かったのか、ラクサスは高笑いをしてどこかへ去っていく。まるで嵐が過ぎ去ったかのような妖精の尻尾。酒樽を椅子代わりにして座るルーシィにはラクサスの言葉を虚言と捉えたようだった。

「継ぐ……って何ぶっ飛んだ事言ってるのよ」

「それがそうでもないのよ。ラクサスはマスターの實の孫だからね」

「だから次のマスターはラクサスになる可能性が高いの」

「まっ！うちは世襲制じゃねーから他の奴がなる可能性は十分あるけどな」

とはいえ、次のマスターになる可能性が一番高いのがラクサスなのは確かだ。

「エルザとかですか？」

「まだマスターになるには力不足！まっ、今はどいつもこいつも問題抱えてるからマスターになれる奴は1人もいねーんだけどな」

妖精の尻尾の現役のS級魔導士はアルトリス、エルザ、ラクサス、ミストガン、ギルダーツの5人だが、この内エルザは実力不足が否めず、ミストガンはコミュニケーションに難がある。ギルダーツはそもそも3年間帰って来ておらず、アルトリスに至ってはマスターになる事を断固拒否している有り様だ。

その為、アルトリスとしてはラクサスの性格が落ち着けばマスターになるつもりのある彼がなる事に異論はなく、むしろ万々歳であるのだが。

「はい！この話はお終いにして……みんなクエスト頑張ってねー！」

れ……!!」

「は、はいー!! !!」

しかし、アルトリスの願いもルーシィの奮闘も虚しく、ルピナス城下町半壊の報せが届く事となる。

「あのバカどもー!! !!」

身代わり

穏やかな日々だ。雲1つない青空と心地よい風。小気味いいリズムでトンカチを叩く音が辺りに響く。マカロフは評議院に始末書を提出に行っている為不在

「さてと、次はどの仕事にすっかな〜？」

この約2週間、アルトリスはお金が心配で高額クエストを幾つか掛け持ちしていたが、その甲斐あってお金はある程度は補填が出来た。またすぐ仕事に行かなくてはならないが、この2週間は新たに賠償金やらがそれ程加算されずに済んだおかげで精神的には楽なものがある。

アルトリスがS級魔導士専用のクエストボードを眺めていると、エルザが声を掛けてくる。

「アルトリス。ミラはどうした？」

「ハッピーと買い物に行った」

「そうか。偶には一緒にケーキを食べに行こうかと思っていたのかな」

エルザの言葉にアルトリスは笑みを溢す。まだミラジェーンが魔人と呼ばれていた頃、ナツとグレイのように顔を合わせる度に喧嘩し

ていた頃では考えられない言葉だった。2人も成長しているという事か。

「前はあんなにやり合ってたのに変わるもんだな」

「私達もまだまだ未熟者だったからな」

2人がそんなたわいもない話をしてしていると傷だらけになったハッピーがギルドに飛び込んで来た。翼を生やし、宙に浮かびながらもその表情は混乱している印象を抱かせる。

「た、大変だー!! !!」

買い物に行った筈なのに荷物を持っておらず、更には魔法の翼^{エーラ}を使って勢いよく駆け込んで来た事を見ても何かが起きたと見るべきだろう。

「ハッピー……ミラはどうした？」

「ミシミシミシミミラが……ミラが……!! 拐われちゃったー!! !!」

「

今から1時間程前に時を戻そう。ミラジェーンとハッピーは買い物に行っていた。ハッピーがついて行った理由は手伝えば魚を貰えるという何とも現金な理由だった。

ミラジェーンは両手で紙袋を抱え、ハッピーは翼で浮かび、エコバッグを両手でぶら下げながら歩いていた。

「買い出し手伝えてくれてありがとう、ハッピー」

「あい！」

買い足したいものは買い、後は帰るだけという2人。しかし、その行く手を男達が阻む。たちまち囲まれてしまった2人は退路を失う。

「お前がミラジェーン・ストラウスだな？ルーシィ・ハートフィリアはどこだ？」

いかにも柄の悪そうな男達。ルーシィを狙う理由は先の抗争もあって心当たりがある。警戒を強める2人は男達を見る。何者なのかは分からないが、ミラジェーンには戦う力はなく、ハッピーも同様だ。警戒している姿勢を見せつつも逃げる準備を整える為、2人は買い物袋を地面に置く。

「あなた達は？」

「オレ達は幽鬼の支配者だ！」

そう言って男達はミラジェーンに近寄る。それと同時にハッピーがミラジェーンを掴んで飛ぼうとするが、ミラの左足を掴まれてしまい、それは適わない。

「この……!!」

ハッピーは掴んだ男を振り解こうとするが、そうはさせまいと7発の魔法弾が直撃。翼が解け、ミラジェーンを離してしまう。地面に滑るように着地したミラジェーンは擦り傷を負うが、それに構わずハッピーを抱く。

「ハッピー……!!」

意識はあるが、ボロボロの状態だった。ハッピーをこんなにした元凶の魔導士達をミラジェーンは睨み付ける。

「あなた達！何のつもりなの!? もう妖精の尻尾と幽鬼の支配者の抗争は終わったの！戦う理由なんてないのよ！」

2人の男に腕を掴まれ、ハッピーは投げ捨てられる。そこでミラジェーンは彼らの狙いが自身である事を悟った。利用される屈辱。せめてもの抵抗にと足に力を入れるが無理矢理引きづられ、彼らについて行くしかない。

「まだ戦争は終わっちゃいねー!!　　いいか猫!ミラジエーンを返して欲しければ、オレ達の本部にルーシー・ハートフィリアを連れて来い!!　期限は明日の0時までだ!!」

傷の手当てを受けながらハッピーは事の顛末を話す。それを聞いたメンバーの顔は一樣に怒りを感じさせる。

「ごめんよ……オイラ、ミラを守れなかった……」

この男《アルトリス》を除いては。穏やかな表情を浮かべ、冷静にハッピーに男達がいると話した場所を尋ねる。もちろん、怒りを感じていないわけはなく、ハッピーを落ち着かせる為だ。

「お前は悪くねーよ。奴らはファントムの本部に連れて来いって言ったんだな？」

「あい……」

ミラジェーンが人質にいる以上、相手を刺激するわけにはいかない。そんな事をしてしまえば、彼女が傷つく可能性があるからだ。

ここは要求をのむフリをして、ミラジェーンを救出。その後、相手の殲滅に動きたいところだ。とはいえ、相手も馬鹿ではないだろう。上手く相手を騙す方法を考えなくては。

そんな事を考えているとルーシィがどこかへ行こうとした為、彼女の腕を掴む。大方、幽鬼の支配者の本部だった場所へ行こうとしているのだろうが、それは阻止しなくては。

「待てよ！どこ行く気だ？」

「あたしのせいでミラさんが捕まったんだ!! あたしが行かなきゃ！」

涙を浮かべ、そう話すルーシィだが、やや短絡的に行動しようとしすぎだろう。ミラジェーンもルーシィもどちらが敵の手に落ちても駄目なのだ。その為にも、一度皆が冷静になる必要がある。

「冷静になれ。冷静にならなきゃミラは助けられねえよ……」

「お前もだよ！クソ炎！」

「エルフマンもね」

グレイがナツを、ロキがエルフマンを拘束する。縄で嚴重に縛り付け、身動きが取れないようにした。今は午後3時。タイムリミットは後9時間か。これだけあれば作戦を練る時間は十分にある。

「今すぐ姉ちゃんを助けに行かねーと！奴らをこのままにしておくのは漢として我慢ならん！」

「そうだ!! 仲間が拐われたんだぞ!! オレは今すぐ助けに行くんだー!!」

とはいえ、今にも縄を破って助けに行きそうな2人を説得する必要があるか。そう思ったが、その前にエルザの怒号が響く。

「黙れ！私達がミラを助けに行かないとでも思ったか!？」

「相手は徒党を組み、ミラちゃんを拐った。つまりこれは計画的犯行と考えるべきだ」

「しかも相手はミラちゃんを人質にルーシィの受け渡しを要求してる。ミラちゃんを助ける為にルーシィを渡すわけにはいかねえ……かと言って人質がいる以上、実力行使で無理矢理やるわけにもいかねーんだよ。だから今、作戦を考えようとしてるんじゃないか！」

ロキとグレイが噛み砕いて説明をする。それを聞いて納得するナツとエルフマン。しかし、グレイとナツはライバル関係にあり、売り

言葉に買い言葉。2人の低レベルな言い合いが始まってしまふ。

「ちったあ考えろ。脳筋が！」

「何だと!? やんのか!? 変態ヤロー!!」

「おう！上等だ！やってやろうじゃねーか！」

「やめんか！」

それを止めるのはやはりエルザだったが、腕を組み押し黙るアルトリスに怪訝な視線を向ける。作戦は組み上がりつつある。

「アルトリス。どうした？」

「……少し時間をくれ……」

しかし、それは危険も伴う。これ以外に作戦がないか考える時間が必要だった。

幽鬼の支配者本部があった丘。しかし、移動要塞無き今、そこに建

物はない。代わりに見えるのはどこまでも広がる野原と森だけである。ここに連れて来られたミラジェーンは縄で後ろ手に縛られている。

「あなたはエレメント4の……」

彼女を出迎えたのはエレメント4のソルとアリアだった。彼が今回の首謀者なのかは分からないが、構成員は100名程。恐らくは幽鬼の支配者の魔導士だった者だけではないのだろう。短期間でこれだけの人数をかき集められた事に驚嘆すると同時に、この力を別の事で生かす事は出来なかったのかと思うと複雑な心境だ。

「私はソル。ムッシュ・ソルでございます。そしてこちらは同じくエレメント4のアリアでございます。ご機嫌よう、ミラジェーン様」

「ルーシィをどうするつもり？」

「決まっているでしょう。彼女を餌にハートフィリア財閥の財産全てを搾取し、幽鬼の支配者を蘇らせるのです！」

やろうとしている事はジョゼと同じようだ。だが、それを看過するわけにはいかない。妖精の尻尾が必ず計画を阻む。ミラジェーンはそれを信じていた。

「もう戦争は終わったのよ！」

「ええ。ですからこれは生まれ変わった幽鬼の支配者と妖精の尻尾

の抗争！私がジョゼ様の思想を継ぎ、新たな幽鬼の支配者を築くのです！手始めにルーシィ様を手中に収め、ジョゼ様が出来なかった事を成し遂げるのです」

「あなたがジョゼを慕う気持ちがあるのは分かったわ。それでも！その為に他人を傷つけていい理由にはならない筈よ！」

ルーシィの葛藤を知らない人間が好き放題言うのは我慢ならない。仲間を道具のように扱うソル達が許せなかった。

「あなた達の思い通りにはさせないわ！妖精の尻尾があなた達を止める……!!」

夜6時。タイムリミットまで後4時間。アルトリスはルーシィの手を縄で結び、ミラジェーン達がいる丘へ向かおうとしていた。

「悪いなルーシィ、ミラを救う為だ……準備はいいな？」

「アルトリス……ええ、大丈夫。準備万端よ」

考えた末、アルトリスは彼らの要求をのむ事を選んだ。これがミラジェーンを救う為の最善の策。彼女を助ける為に動く。

「それじゃあ行くぞ」

チカラ

午後8時。アルトリスがルーシーを連れて丘へ到着した。

「まさか本当に連れて来るとは……それ程、ミラジエーン様が大事なのですねえ」

ミラジエーンは何も言わないルーシーを見る。傷ついた身体。誰がやったのか、それは言わずとも分かる。

「アルトリス!! 何でルーシーを……!?」

顔を歪ませるミラジエーンに対し、アルトリスは眉一つ動かさない。

「……お前を助ける為にはこうするしかねーんだ」

「妖精の尻尾は仲間思いのギルドだと思いましたが、違ったようです
すねえ」

ソルの嘲笑が耳に障る。妖精の尻尾はそんなギルドではない。アルトリスも仲間を売るような人ではない。そうミラジエーンは信じている。

「さて。それではルーシー様を渡していただきましたでしょうか」

「同時交換が条件だ」

「まあ、いいでしょう」

ミラジェーンとルーシィは前を歩かされる。その丁度中間に差し掛かるところで2人は対面する。

「ルーシィ……」

「ミラちゃん」

「どうしました？ルーシィ様」

ミラジェーンがアルトリスの側へ歩く一方、ルーシィは足を止めて動かない。ソルがそれを訝しんだ次の瞬間。ルーシィの縄が解け、右手から紫の炎がファントム目掛けて放たれる。紫の炎は粘着性が高いのが特徴の炎だ。蜘蛛の巣状に展開された魔法は1秒2秒の僅かな時間ではあるが、ファントムの動きを止める事に成功した。

「パープル・フレア
紫の炎！」

「火竜の咆哮!!」

上空から放たれた^{サラマンダー}火竜の炎が妖精と幽鬼を隔てる。

計画通りミラジェを助け出す事が出来た。後は幽鬼を殲滅するのみ。妖精の住む森に陰険な幽鬼は相応しくない。

「確かにミラは返してもらったぜ」

「謀ったのか！」

変身魔法を使い、ルーシィになりすましていたマカオが魔法を解く。変身魔法は術者の技量次第では質量すら変えられる。魔力を模倣する事は不可能だが、幽鬼の支配者のメンバーはルーシィといった時間の短さ、捕まった際の彼らの態度から彼女の魔力を覚えてはいないだろうと結論づけた。

全てはマカオがいたからこそ可能となった作戦だった。

「オレ達が大人しく仲間を渡すと思うのかぁ？」

「マカオは変身魔法が得意なんだ。見事に騙されてくれちゃって…助かったぜ」

「だが、人数はこちらが上でございますよ！」

200人を超えるファントムの軍勢に対して、妖精の尻尾はアルトリス、ナツ、マカオ、ハッピー、ミラジェーンのみ。しかし、エルザ達が後方で待機しており、それも大した問題ではない。先程のナツが放った火竜の咆哮でミラの救出は彼女らにも伝わっている筈だ。

「どけー!!」

「魔力を持たねー奴がいるんだ！魔法は使うなよ！」

「……分かったよ！」

迫り来るファントムの軍勢。その中にナツが突っ込んで行く。相変わらずの無鉄砲ぶりだが、ハッピーは軍勢の中を掻い潜ると彼を掴み、空を舞う。

「ハッピー！！」

「あい！！ ナツ！いくよ！！」

「おう！！！！」

空を自由自在に舞い、蹴りやパンチを繰り出していく。ナツは魔法を使わずに相手の数を少しずつだが、しかし確実に減らす。

さて。その一方でアルトリスはアリアと対峙をする。背にはミラ。理由は分からないがこちらに向かって来る敵は僅かで残りはナツを狙っているように見える。気になるのは彼らの中にどこか覚えのある気配がちらほらと混じっている事だが、何故覚えがあるのか。それを思い出せない以上、考えても答えは出ないだろうとすぐに気に

する事をやめる。

ナツを追わずにミラを狙う敵はごく少数という事もあってマカオ1人で対処出来ているし、ソルは高見の見物を決め込んでいるのか動く様子はない。そうなるとアルトリスにとって目下の問題はアリアのみだった。

「ちっ……気配も魔力も感じられねー」

おそらく目に包帯を巻き、目を閉じる事で魔力を抑えているのだろう。それが魔力の感知がほぼ0距離でなければ難しい原因か。更にこの夜闇に紛れ、ミラを狙う為に攻撃を防ぐのがやっつとだ。しかし、アリアにも消せていないものがある。

「ミラ。しっかり掴まってるよ？」

ミラを横抱きにし、アルトリスは空を舞う。魔力で錬成した翼をはためかせ、森の中を進む。

「アルトリス！何で森の中に行くの!？」

主戦場はナツ達に任せ、アルトリスは森を駆ける。

「心配すんな。オレを信じろ……!!」

アルトリスとミラがアリアと共に戦場を離脱した一方、エルザ、グレイ、ルーシィ、エルフマン、ロキが戦場に到着する。

「待たせたな!! ナツ! マカオ! ハッピー!」

「おっせーぞ!! お前ら!! !!」

ハッピーに掴まれ宙に浮いているナツがエルザに文句を言う。するとナツを追っていた軍勢が動きを止める。彼らから感じられる感情は恨みなのだろう。

「やっと揃ったな! 妖精の尻尾!! !!」

「何なの!？」

しかし、幽鬼の支配者が妖精の尻尾に向ける感情とはどこか違うように感じてしまうのだ。すると今まで動かなかったソルが口を挟む。

「彼らはあなた方に恨みを持つ者達でございます」

「恨みだと？」

その言葉にエルザはキッと目を鋭くさせる。そこでルーシィはある

事に気付いた。目の前にいる若い男は前に仕事先で会った男だ。そう、確か仕事内容は盗賊団の退治。しかし、仕事は成功したもののナツがいくつか家を壊してしまっている。

「あれ……？ あの人って……」

「そうだ!! 火竜!! お前のせいでオレの両親の家は無くなっ
た!! !!」

堰を切るように次々と彼らは声を上げる。ここにいるのはナツ達による被害にあった人達なのだ。

「やっぱり……! あの人にはナツに仕事で建物を壊された人だわ!!」

ルーシィも何人かは見覚えがある。彼らがここにいるのはソルに唆されたからではあるが、その動機は至ってシンプル。ナツ達に住む場所や町が誇る観光地などを壊された恨みだ。

「お前のところのマスターとアルトリスって男が弁償してくれて直接謝罪もして来たが、それでオレ達の気が晴れるわけじゃねー!!」

「弁償代ってオイラ達の報酬から支払われてるんじゃないの?」

「あれだけで足りるか! 報酬の一部と足りない分はお前らのマスター達が支払ってるんだよ!」

まさに衝撃の事実といったところか。立て続けに明らかになった事実にナツやエルフマンは理解が追いつかない様子だ。そんな中でもルーシィはエルザが冷静なように見えた。しっかりと事実を受け止め、強い覚悟を秘めている。

「……私達もファントムとの抗争でギルドを失う事となった身……お前達の痛みはよく分かる……」

「それでも」とエルザは話を続ける。

「仲間を傷付ける事だけは許すわけにはいかんだ……!!」

そう言ってエルザは地面に手をつき、頭を下げる。所謂土下座というものだ。ここにマスターもアルトリスもいない。妖精の尻尾の代表としてエルザは彼らに精一杯の謝辞を述べる。

「許してくれとは言いません。ですが、我々の行動によりあなた方に苦痛を与えた事……本当に申し訳ありませんでした」

そしてエルザの後に続くようにナツが、グレイが、皆が頭を下げる。

「オレ達にとってギルドは大事なもんだ。なのにオレはお前らの大事な居場所を壊しちまってた事に気付かなかった……本当にごめんなさい」

皆が謝る中、エルザの前に立った年若い男性が涙を流し右腕を振り上げる。その涙からは色々な感情が感じられた。ルーシィは短い時

間でもギルドにはたくさん思い出がある。彼らは数年な10年以上の長い時間の中で数え切れない思い出を失ったのだ。

「ごめんなさいで済むかっ……ふざけんかって言ってやりてーよ……」

だが、男性は力なく腕を下ろす。零れる涙を前に妖精の尻尾のメンバーは動けない。

「……でも一番は……お前達の口からそれが聞きたかったんだっ……!! 心からの謝罪を、聞きたかった!!」

周囲が静まり返り、すすり上げる声のみがその場を支配する。その時だった。ソルが横槍を入れ、話に割り込んで来る。

「ノンノンノン。3つのNOでお話になりませんな。あなた方の恨みはその程度なのですか？」

「うるせえ！こいつらも反省して謝ってんだ。オレはもう許す!!」

エルザの前に立った男性がそう言うのとソルは明らかに不愉快だと言わんばかりの表情を見せた。次の瞬間、彼が放ったのはソルの最大の魔法。砂を固めて拳にする魔法石膏プラトルンナートの奏鳴曲だった。

「石膏の奏鳴曲!!」

辺り一帯を砂塵が包む。接収・テイクオーバー・ピーストソウル獣王の魂で巨大な獣人の姿となったエルフマンが攻撃を受けた事で皆無事だったが、彼らは一般人。それにも関わらず危害を加えようとするのは卑怯と言わざるを得ない。その証拠にと言うべきか妖精の尻尾のメンバーは皆一様に怒っている様子を見せる。

「貴様……彼らは魔力を持たない一般人だぞ！」

ソルの額を一筋の汗が伝う。土下座をしているエルザ達を自身の最大の魔法で倒すつもりだったのだ。それがあっさりと防がれ、彼の計画は頓挫する。更に言えば折角苦労して集めた人々が妖精の尻尾を許してしまったのも誤算だった。

「テメエ覚悟は出来てるんだよな？」

バラした後に妖精の尻尾のメンバーに人々が怒りのままに暴行を加え、弱ったところを倒すつもりだったのだ。しかし、それも叶わない。思えば最初にミラジェーンを奪い返された時点で経過は狂っているわけだが、最早そんな事を考えている余裕はない。

ソルが選んだのは撤退。後ろを向いて走り去ろうとしたが、既にグレイとロキが背後に回っていた。

「ノンノンノン……」

「妖精の尻尾を敵に回した事が貴様の失敗だったな……!!」

エルザの言葉が放たれた1秒後、ソルの断末魔が響き渡った。

アルトリスは木々に囲まれた場所でミラジェーンを下ろす。目を閉じて神経を研ぎ澄ます彼が頼りのは目でも魔力でも気配でもない。頼るのは音だ。

「森の中じゃますます不利になるんじゃない……」

「しっ！静かに」

草木が揺れる音、風が吹いた音。それがアリアの居場所を伝えてくれる。気配を消し、魔力を消し、魔法で風と同化し、姿を眩ませよ。うとも音だけは誤魔化せない。

「そこだ!!」

ミラジェーンの背後から現れたアリアをアルトリスが蹴り飛ばす。

「気配や魔力は消せても音までは消せねーみてえだなあ」

「やはり煉獄のアルトリスが相手となると私も本気でいかななくてはなりませんなあ」

アリアは包帯を外し、目を開く。溢れるのは確かに先程より強大で、中々のものだ。しかしこれだけの魔力ともなれば隠し通すのは不可能。感知は簡単だった。

「夜はやっぱり血が騒ぐ……」

そして、アルトリスのような者は夜が力をくれる。夜がその魔力をより強くしてくれるのだ。

「死の空域・零！」

「そーいや……お前のせいではらく寝込む事になったんだけっなあ」

アルトリスは死の空域が迫る中、左手を前に翳す。そこから放たれた魔力の波動が死の空域と接触した次の瞬間、死の空域は消滅する。

「空域が消えて……!?」

「お前達がどう思ってるかは知らねーけどな、抗争はもう終わったんだぜ。ファントムももうねーし、オレ達に争う理由はねーんだ。お前達も新しいギルドに入ったりしてよ……新しい道を進んでいいんじゃないの?」

まだまだ余裕があるアルトリスに対してアリアにはもう打つ手が無い。ただ、それでも尚彼は抗って来る。

「黙れ……!! 私のマスターはマスター・ジョゼただ1人! 妖精を駆逐することが我が使命!!」

ジョゼに忠誠を誓い、妖精の尻尾と敵対する道を選ぶアリアにアルトリスは感服する。その主がどこにいるかは知らないが、彼は幸せなものだ。ならば、自分はそれに応えるのみだ。

「……そうか。なら、もう何も言わねーよ!」

アルトリスの魔力を込めた拳がアリアの腹部にめり込むと彼は気を失い、力なく倒れる。人を殺す魔法を罪の意識なく使う彼は世間から見れば立派な魔導士ではない。しかし、立派な幽鬼の支配者の魔導士ではあった。

「……出来る事なら正道を進むお前が見たかったもんだ」

楽園の塔

幽鬼の支配者の残党との一件以来、妖精の尻尾が建物などを壊したりする事は滅多に無くなった。ナツなどは壊さないように力を制御する事が難しく上手く戦えずに苦労しているようだが、それも良い経験だ。

さて。この数日の間にロキの失踪騒動があったりと相変わらずの妖精の尻尾であった。しかも、彼は星霊であった事が判明した。

「星霊だ〜!?」

「んーまあ、そーゆー事」

ナツが騒ぎ、ロキが照れ臭そうに頬を掻く。今までのような無理をした笑顔ではなく自然な笑顔が溢れている。その笑顔を見てアルトリスは安堵したような感情を覚える。彼は自らの足で再び歩く事が出来るのだ。彼の過去を知る身としては嬉しい限りだった。

「ロキは獅子宮の星霊なのよ」

「獅子ってアレ!? 大人になった猫!!」

ルーシィの言葉を聞いたハッピーが興奮気味に反応する。同じネコ科の動物ではあるが、猫が成長したら獅子になるという事はない。

「うん、そうだね」

「違ーう!!」

ハッピーの言葉を肯定したロキにすかさずルーシィがツッコミを入れる。

「つーかお前、今まで通りで大丈夫なのか？」

「これからはそうはいかないね。ルーシィがオーナーになってくれたからね。ルーシィのピンチに颯爽と現れるさしずめ白馬の王子様役という事かな」

元々、人間界に長居する事はその身が消滅しかねない行為。ましてや今はルーシィの星霊となったのだ。今までのようにというのは無理な話なのである。

「そういうわけでこれからの2人について話あおうか」

ロキは流れるような動作でルーシィを横抱きにし、何処かへ行こうとする。ルーシィは下ろすように言っているが、ロキが下ろす事はなく、また皆も気にした様子はなく、ナツに至っては呑気に星霊が欲しいと呟く有様だ。

「いいなあ。オレも星霊欲しいなあ」

「どんな星霊ー？」

「そりゃあ竜ドラゴンだろ!! 滅竜魔法覚えたってのに本物の竜と戦えねーのは甲斐がねえってもんだ」

「竜座の星霊が本物の竜って保証はどこにもねーけどな」

アルトリスの言葉にナツは驚きを隠せない。竜座の星霊が本物の竜でない事が信じられないようだ。

「本物の竜じゃねーのか!? 竜の星霊だろ!!」

「ロキは獅子座だけどオレ達の知ってる獅子じゃねーだろ?」

「何だ。本物の竜と戦えねーのか……」

本物の竜を呼び出して力比べを出来ない事に落胆するナツだが、抗議の意を込めてルーシィが叫ぶ。

「あのねえ、そもそも星霊は力比べの為に呼び出すものじゃないのっ!」

「そうそう星霊は愛を語る為に…」

「あんたももう帰りなさい」

ルーシィがロキを星霊界に帰そうと鍵を向ける。それを制止したロキは何やらポケットから何枚かのチケットを渡す。高級リゾートホ

精神的にもな」

ミラジェーンが拐われた一件以来、ナツ達は変わろうとしている。自由にやりながらもその為に無自覚に誰かを傷付けるような事はとでも少なくなった。

ナツ達は本当の意味での自由を知ったのだ。確実に成長している彼らを見て、アルトリスはある覚悟を固めていた。

「もうオレがいなくても大丈夫だな」

その小さな呟きはそばにいたミラジェーンにも聞き取れなかった。しかし、その様子に不自然さは感じたのだろう。彼女は怪訝な表情を浮かべ、アルトリスの名を呼ぶ。

「アルトリス？」

「っと、そろそろ行かねーと怒られちゃうな。しばらくは街にいらねえから何かあったら連絡くれ」

アルトリスは誤魔化すようにそう言ってギルドを去る。

「……うん。いってらっしやい……」

ミラジェーンは寂しそうな表情を浮かべ、彼を見つめるだけだった。

「……あの女の言ったのはホントだったのか」

魔法評議院からカIIエルム国近海に建てられたという楽園の塔の調査と可能ならば塔の破壊をと依頼されたアルトリスは上空から塔内部への侵入経路を探っていた。しかし、正面から乗り込む以外に道は無さそうだ。

「にしてもRシステムなんてバカげたもんがまだあるなんてな」

「Rシステム」とは正式名称をリヴァイブシステム。またの名を楽園の塔と言い、400年前に存在した伝説の黒魔道士・ゼレフが考案した命を蘇生させる魔法である。

誰を生き返らせようとしているのかは分からないが、アルトリスとしても依頼に関係なく見過ごす事が出来ない事態だ。

「（……………命ってのはそんなに軽いもんじゃねえんだって事を連中に教えてやらねーとな）」

「ごちゃごちゃ考えてる時間はねえな」

アルトリスは地上に着地し、正面からの突入を試みる。

「ぶっ飛ばして行くか」

一方の評議院本部・E R Aでは9人の評議員達による会議が繰り広げられていた。

「Rシステムがまだ残っているだ?! そんなバカな!!」

「8年前……黒魔術を信仰する教団が莫大な資金を投じて建設しようとしていたRシステム。7つの塔は全て評議院が押さえ今では跡形もない筈」

普段は腰の重い評議院と言えども事の重大さは理解している。Rシステムが禁忌とされるのは死者の蘇生という倫理に反した魔法であるが故。見過ごす事は出来ない。

「8つ目の塔があったんよ。カIIエルムの近海にのう」

「Rシステムじゃねえ……楽園の塔……だろ」

「呼び方などどうでもいい!! あれはこの世にあってはならない禁

忌の魔法!! 直ちに軍を送る手配をするのだ!!」

オーグ老師はそう言うものの、評議院は慎重な姿勢を崩さない。

「しかし、相手が分からぬ以上……迂闊に手は出せぬ……」

「相手が分からぬだと?例の魔法教団ではないのか?」

「塔を占拠しているのはジェラルドと名乗る謎の男のようなのだヨ。名前以外の素性は全て不明」

議会の中では慎重論が蔓延っている。オーグが声を上げる一方でジークレインとウルティア、そしてジークレインを注視するヤジマの3人は沈黙を保つ。

「そんな事を言っている場合か? 軍を送り塔を一刻も早く占拠するべきだ!!」

「鳩どもめ……」

ジークレインの一言で彼に8人の議員の視線が注がれる。

「軍の派遣程度ハト派だと言ったんだ。あれは危険過ぎる。この世にあっちゃんならねー!なら、方法は1つだろ」

「サテライトスクエア衛星魔法陣からのエーテリオン!!」

評議院が保有する魔導兵器・エーテリオンの使用を提案する。驚き、拒絶反応を見せる者が多くいる中、ウルティアが賛成の意を示す。あと3名の同意でエーテリオンは使用出来る。未来は予想だにしない方向へ向かおうとしていた。

【楽園の塔最上階】

石で作られた椅子に座るマントの男・ジェラールは高らかに笑う。ナツ、グレイ、ルーシィの3人は元エレメント4のジュビアと共に水中の抜け道から塔内部へ侵入。アルトリスは正面から塔内部へと進む。一方でエルザとハッピーは囚われの身となっていたが、エルザは牢から脱走し、ジェラールを探す。

自身が当初思い描いていたシナリオとは少々異なるが、それもまた一興か。

「ふはは!! 面白くなってきやがった。エルザの逃亡にナツ達の侵入。そしてアルトリスか。どこから嗅ぎ付けてきたかは分からねーが、これなら生と死の楽園ゲームが盛り上がるのは間違いないね」

結果が分かりきったゲーム程つまらないものはない。難易度が跳ね上がり、クリアできるか分からないゲームの方が燃えるというものだ。

「そんな事を言っている場合ですか？あのアルトリスという男は聖十に匹敵すると言われる程の魔導士……それに評議院の動きも気になります。このままでは儀式に支障が出ますぞ」

「あのジジイ共には止められねーさ」

「さあ、楽園ゲームの始まりだ!!」

「このゲーム、勝つのはオレか妖精か^{ジェラール}」

男は考えを巡らせ不敵に笑う。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~24163

FAIRY TAIL ～悠久なるトキの中で～

2021年04月11日 20時36分発行